

---

# 実況パワフルプロ野球！～嗚呼、素晴らしきかな野球人生～

隣のラーメン屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実況パワフルプロ野球！〜嗚呼、素晴らしきかな野球人生〜

### 【Nコード】

N5388R

### 【作者名】

隣のラーメン屋

### 【あらすじ】

今年から男女共学となったラブコメ設定な学校……『私立恋恋高校』。そこに一人の男が入学する。男の名は仙道恭志郎。嘗ては天才と謳われ、現在はリア充を目指す元野球少年である。ある事件により一時的に野球を辞めている彼は、家が近く、可愛い女の子がいっぱいいるという理由で恋恋高校に入学するも、そこで出会ったのは野球をしている女の子と超絶野球バカと俊足オタク眼鏡。仙道の高校生活の明日はどっちだ！\*この作品は実況パワフルプロ野球の二次創作です。オリ主にオリ展開、更にオリ設定が含まれています。

それらを許してくれる寛大な方はどうぞ。

## 一話（前書き）

ルミナス学院から読んでくださった方はお久しぶり、初めての方は初めまして。隣のラーメン屋、略して、となラーです。

心機一転、新作は青春スポ根モノです！

パワプロを知らない人でも楽しめるような作品を作っていきたいです  
すね。

## 一話

春

それは終わりにして始まりを迎える季節。

空は雲一つ無く快晴で、春の代名詞たる花の桜は色鮮やかに咲き誇っている。

それらはまるで俺達新入生を迎え入れてくれているかのよう、優しく見えた。

さて、んなセンチメンタルなことを考え、眠気を誘う校長の有り難い話を右から左へ受け流している俺の名は、仙道 恭志郎。

今日からここ、私立『恋恋高校』へと入学したピッチピチ（死語）の高校一年生だぜい！

随分とアレな名前をしているこの高校だが、今年から女子高から共学となった、ラブコメ辺りにありそうな設定をしている高校だ。

その為女の子が物凄く多く、更にレベルの高い娘も多い。中学時代に見た学校案内の資料に、めっさ可愛い女の子がいっぱい載ってたから即決しちゃった程だ。

実際、新入生挨拶をしていた、学年主席入学の女の子はとても可愛かったしな。いずれお近付きになりたいものだ……

あと、春休みに引越してきた家に近く、野球部が無いってのも goodだ。

何故、野球部が無いことが goodなのかというと、自分で一から創り上げた野球部で強豪を倒して甲子園に出る………何て野球バカの発想からなんてことは絶対に無い。

そんな奴がいたら逆に見てみたい。

本当の理由は全く逆で、野球をしたくないからである。

その訳は色々あるのだが……まあいざれ話すとしてしよう。

話が十分逸れた気がしないでもないが、まあいいとして、折角こん

な女の園のような所に来たのだ。一丁可愛い彼女でも見つけてこの三年間、青春を満喫してやるぜい！！

……と決意を胸に抱くと同時に、卑劣なる校長の催眠術と春の陽気にやられ、俺は意識を失った。

春眠暁を覚えずとは誰が言ったことだったか…… z z z z z

「君はとりあえず馬鹿なのか？」

決意を新たに高校生活をスタートさせた俺だが、現在教務室で正座をさせられ、担任らしき女教師の説教を受けている。

理由は言わずもがな、入学式中に爆睡していたからである。

だって40分ですぜ40分？普通挨拶するのはさらっと済ませるモノじゃないんですか？

そんな時間校長の催眠術の如き長話と、春の陽気を浴びれば誰だって寝る以外の選択肢は見つからないでしょ。

というか、絶対俺以外にも寝てた奴はいたね。

胸中に沸々と憤りが沸き起こり、その旨を先生に伝えるも

「だからって横になって寝る奴があるか！」

普通に怒鳴り声で返された。

いやぁ、だって長時間座りっぱなしで寝るのってキツイんですよ？

体は痛くなるし寝難いし。

ならどうすればいいか？

決まっている。

横になる以外にどうしろというんですかい!?

「我慢しろ!というか寝る前提で話を進めるな!」

俺の開き直つての逆切れは正論によって完封された。

一発逆転ホームランを狙ったのに、クソウ……

そして再び再開された説教。

それを相も変わらず左から右へと受け流していると、少し離れたところで俺と同じ様に説教を受けている奴がいるのに気付いた。

見たところ男子だから俺と同じ新入生なのだろう。

しかし、そいつの格好はあまりに奇抜だった。

ユニフォームである。

野球部の無いこの学校の入学式で何故か野球のユニフォーム姿なのである。

何あれ凄え気になる

その光景は俺の興味を惹き付けるには十分だった。

好奇心を激しく刺激された俺は、未だに説教をしている担任を無視して、最早堂々と胡坐を掻いてそいつを観察することに。

どうやら何故ユニフォームなのか、と説教をされているらしい。

それは俺も気になったことだ。

この学校の男子の制服は学ランだ。

当然新学期が始まる前には新入生の手元に届いている筈。

なのにそれを着ないで、野球部の無い学校にユニフォーム姿で来るなんて意味が分からない。

なので、少しばかり期待して男の返答を待つ。  
するとそいつは

「この学校で野球部を創って、甲子園に出場するという気持ちの表れです！！」

突然教務室中に響き渡る大声で宣言した。

……いたよ、野球バカ発想。

俺の皮肉を込めた願望がまさかこうも早く叶うとは、幸先いいねえ

……

しみじみとそんなことを思いながら、俺は声を殺して笑った。その後、尚も観察を続けようとしたが、担任の正義の鉄槌（拳骨）が脳天に落とされ、のた打ち回ることになるのだが、これは完全な余談である。

……そんな学校生活が始まってから少しの時が経った。

喋る相手も順調に増え、女子ばかりのこの学校に少しばかり慣れてきた俺に、ある出会いがあった。

俺はその日早起きをした。

バッチリ頭が覚醒しており二度寝は不可能。

ということと、気分転換変わりにと普段より大分早めに学校に来た。のだが……

暇だ。余りにも暇すぎる。

まあ、当然といえば当然である。

朝早くに学校来ている奴なんて部活で朝練している奴か、物凄い真面目な奴、そして俺のような暇人の三択ぐらいだろう。



朝練している奴が教室にいる筈も無く、だからといって真面目な優等生とは話続かそうだし、俺のような奴はまずそうそついないだろ  
うし……  
頭を捻ってどう時間を潰そうか考える。  
しかし、気付いてみれば俺は何故かグラウンドにいた。  
どうやら考え込んでいるうちに、昔の癖で無意識にグラウンドに足を向けていたらしい。

今の俺には来ても意味の無い場所なんだがな……

胸中で少しばかり自嘲すると、ふと耳に喧騒が聴こえてくる。  
視線を向けてみると、そこではソフトボール部が朝練をしていた。  
響き渡る金属音に、活気のある声とボールがグラウンドに飛び交う。  
誰もがボールを一生懸命に追いかけ、土塗れになりながらも活き活きとした表情で、練習をこなしていた。  
その様子からソフトボール部の連中が、目標に向かってチーム一丸となつて努力していることが充分に伝わってくる。  
そんな如何にも青春！といった光景を、何するわけでもなくただポ  
ーっと眺めていると、不意に右肘が疼くのを感じる。  
その右肘を無意識に左手で抑え、溜め息を吐く

「青春、か……俺はこの学校で心から青春できるのだろうか……」

『仙道は「弱気」になった！』

何やら妙なテキストが出た気がしたが、気にせず教室に戻ろうとさつさと踵を返す。

その時、ふとある光景が目に入った。

ソフトボール部が使っているグラウンドの隅で、ソフトボールのユニフォームとは違う服、野球のユニフォームを着たおさげの少女が、

ネット目掛けてピッチングをしていた。  
彼女の傍らには大きめの箱があり、その中には少量のボールが入っている。箱の大きさとボールの量を見るに、随分と投げ込んでいるようだ。  
そんな考察をしながらつい眺めていると、彼女は箱からボールを一球取り出す。  
そして、左足をゆっくりと上げてから踏み込み、体を沈み込ませ、低い位置からの投球。  
その柔らかく美しいフォームに、俺は目を奪われた。

「サブマリン……」

思わず呟く。

それは嘗てアイツが得意としていた、アンダースローと言われている投法だ。

この投法は下手投げという特異性故に、他の投法に比べて難易度が高い。

にも関わらず、綺麗に投げられている彼女に素直に感嘆する。

だからこそ残念に思うのは、リリースポイントが高いことだろう。

アンダースローの真髄は投げる球の軌道だ。

下から上へと伸びてくる球は打ちづらい。だからこそ、リリースポイントが低ければ低い程良いのだ。

しかし、彼女はリリースがまだまだ高い。高すぎる。

これでは中途半端な軌道になり、簡単に打たれてしまうだろう。フォームは綺麗なのに勿体無いと思う。

「もっと踏み込みを深く、そしてより強く踏ん張れ」

だからつい、近付いてアドバイスを送ってしまった。

右肘がまた疼くが今度は無視する。

「え？」

「投げるとき腕に意識を置きすぎだ。意識するのは寧ろ下半身。下半身が安定していないとリリースポイントがバラバラになるし、力の入った球を投げれない」

おさげの女の子はいきなりの助言に戸惑いながらも、俺の言った通りに投げる。

先程よりも深く踏み込み、全身を使って体を沈み込ませ、腕をしながら鋭く振るう。

放たれた球は、まさに水中から浮かび上がるサブマリンの如き軌道を描いて、ネットに吸い込まれていった。

足腰と体幹が弱いのかリリースポイントがまだまだ高いが、及第点だろう。

しかしながら彼女のストレートは女とは思えない程の伸びとキレを持っている。

それに加え独特なしなやかさもある為、大分打ち辛そうだ。

「ナイスボール」

だからパチパチと拍手をしながら賞賛を送る。

女の身でここまでのストレートを放るまでに、相当な努力を積んできたのだろう。

それを含めての賞賛だ。

当たり前っちゃ当たり前だが、彼女は不思議そうな目で此方を見ている。

「あの……君は？」

「ん、俺？俺は通りすがりの男子生徒Aだ。この学校で男子はレアだからよく顔覚えておけよ〜」

カラカラと笑いながら飄々と答える。

しかし今更ながら何で彼女はピッチングをしているのだろうか？この学校にソフトボール部はあっても野球部は無い筈だが……何やら嫌な予感がしてきたぞ

「じゃ、引き続き投げ込みを頑張ってくれたまえ。野球少女よ」

ということとさっさと退散することに。

何か妙な展開になりそうだったしな。

彼女は俺に何か言いたそうにしていたが、特に何もなくその時はそれだけで終わった。

……しかし

「ねえ君、さっきアドバイスしてくれた人だよね？」

普通に同じクラスだったZE

教室で朝のHRが滞りなく終わり、寝て過ごしていた所に声を掛けられた。

視線を向けてみると、おさげサブマリン（仮）は、何やら目をキラキラと輝かせて俺を見ている。

しかし何なんだろうね、この目。

憧れや好意から目を輝かせているんじゃないかと、気のせいかな、絶対好

の力毛を見つけたから輝いているかのように見えるんだが……

「ねえ、聞いてる？」

おつと変な考察立ててる場合じゃねえな。

無視されたとも思ったのか、この娘微妙に苛立ってるみたいだし、とりあえず返事しとかねえと。

「ひ、人違いじゃあ……（弱気発動中）」

「今朝言われた通り、顔はすっかり覚えたから君で間違いないよ」

おつとお、フラグ立てようと妙な言い回しをしたのが仇になったなあ。失敗失敗……って言ってる場合じゃねえな。

更に苛立ったのがギロツてこつち睨んでるし、真面目にいこうか。

「悪い悪い、冗談だ。で、俺に何か用か？」

え〜と……おさげサブマリン」

「誰がおさげサブマリンよ！って、そういえばお互い自己紹介がまだだったね」

同じクラスなのにお互いに名前知らないってどうなんだろうな……

「ボクの名前は早川あおい。

野球愛好会の一員だよ」

ボクっ娘キタコレエエエエ！！

じゃなくて……

「野球愛好会？この学校にそんなモノはなかった筈だが……」

「うん、だからボク達のキャプテンが入学式の日に創ったんだよ」

へえ、随分と酔狂な奴がいたモノだな……って十中八九あいつだろ  
うな……

あのミスター・ユニフォーム

「ふ〜ん……それで結局俺に何の用なんだ？」

まあ、流れから大体予想はつくが……

「お願い！野球愛好会に入って！」

予想通り。勿論俺の言葉は決まっている。

「だが断る」

ドヤ顔をしながらビシツ！と答える。

一度シリアスな場面で言ってみたかつたんだよね、この台詞。い  
ずれは「大丈夫だ、問題ない」とかも言ってみたいね。

「な、何で!？」

「いろいろと理由はあるが、まずこの学校には男子が7人しかいな  
い。

全員入ったとしてあんたも入れて8人。それじゃあ試合は出来ない」

そんな所に入って何をしろと？

「次に、素人を寄せ集めて勝てる程高校野球は甘くない」

この地区には、あかつき大附属を筆頭にそれなりに強い高校が数多く存在する。

例えミスター・ユニフォームが、俺の旧友であるあかつきの天才君と同等の実力を持っていたとしても、周りが素人だらけなら勝てるモノも勝てないだろう。

こんな高校に野球の実力者がいるとも思えないし。そして何より

「最後に、俺自身が野球をやりたいくない」

これが一番の理由だ。

別に野球が嫌いというわけではない。寧ろ好きだ。大好きだが、俺には野球ができない理由がある。

いや、はじめというべきなのか……まあとにかく色々と事情があるのだ。

「うん、そこまで言うなら無理には誘わないよ。

けど、ボクは個人的に君に入ってもらいたいし、気が向いたら練習だけでも見に来てよ。

見てたら野球やりたくなってくるかもしれないしさ」

「ま、気が向いたらな」

「あ、そういうえ聞き忘れてたけど君の名前は？」

「そっぴや言つてなかつたな。

俺は仙道。仙道恭志郎だ。よろしく」

そう俺が名乗ると同時に授業開始のチャイムが鳴り響く。

早川は、仙道？どこかで聞いたことなるような……と首を傾げながら慌てて自分の席へ戻っていった。  
しかし野球愛好会か……少し興味深いな。ミスター・ユニフォームのことも些か気になるし……

……というところで

「来ちゃった」

放課後、野球愛好会とやらが練習しているであろうグラウンドに訪れる。

気分はいきなり彼氏の家に訪問してきた可愛い彼女。

しかし、彼氏の家には知らない女が……

『誰よその女！？私という彼女がいながらどういことよ！？』

『あら、貴女が彼の言ってた二番目の女？随分と下品な顔しちゃっ

て……まるでお猿さんじゃない』

『黙りなさいよ、この泥棒猫！！』

そして修羅場突入してドロドロとした三角関係が……

「どうして初対面の君にそんなこと言われなくきゃならないのよ！？」

「すみませんすみません！！春休み昼ドラ見すぎてすみません！！」

……って、ん？怒鳴り声につい弱気になって謝っちまったが何だ？視線を怒鳴り声のした方に向けてみると、早川と鉢巻きをした、格



好からしてソフトボール部の勝気そうな美少女が何やら言い合いをしていた。

あの女は確かソフトボール部の……小林幸子だったか……うん、絶対違うな。そんな豪華衣装で紅白の大トリに出てきそうな名前じゃなかった筈だ。

そんなことより何か揉めてるみたいだな……

遠目でよくわからんが、尊大な態度をしている鉢巻幸子（仮）に、早川が喰ってかかっているように見える。

しかしあの様子だと大事になりそうだな……ソフトボール部の奴がチラチラと見てるし……しゃあねえ、今日知り合いになった誼だ。仲裁にでもいこうかね。

ため息を一つ吐き、俺はゆるりと二人のところへと向かう。

「よう、その美少女お二人さん。随分と穏やかじゃねえな、どうした？」

険悪なムード漂う空間に、あえて空気を読まず明るく入っていく。  
『弱気が除去された！』

……もうツッコむまい

「仙道君……」

「あんた誰よ？」

怪訝そうな目を向けてくる鉢巻幸子に、俺は肩を竦めながら答える。

「通りすがりの……ってこれはもういいか。」

俺はその野球少女のちょっとした知り合いだ。

で、何を揉めているんだ？遠くからでも聞こえてきたが……」

「それは……」

「この娘に忠告してあげたのよ。」

女が野球やるなんて辞めた方がいい。足手まといにしかならないって」

「ッ！そんなのやってみなきゃわからないでしょ！！」

……ああ、なるほどね。流れはだいたい理解した。

早川が野球の練習中に鉢巻幸子登場 早川を批判 早川プツン  
口論、つてな感じが。

しっかし何で口を挟んできたのかねえ、好きにやりしゃあいいのに…… 純粋な忠告か、はたまたソフトボール部に引き抜こうって魂胆か、それとも別な何かか……

「やらなくても結果は見えているわ。」

体格、身体能力、体力、全てが女は男に劣っている。

なのに女が野球だなんて…… 見世物になって恥を掻くだけよ」

「知った風な口利いて、勝手に決め付けないでよ！！」

まあ、今はそんなことどうでもいい。

とりあえず2人を止めねえと。

2人の言い争いをBGMにしばし黙考。

そしてふと、昔あいつから聞かされた話を思い出す。

「野球の本場、アメリカのメジャーリーグにはジム・アボットって選手がいたんだが。知ってるか？」

「何よいきなり……知らないけど……」

話の流れを無視しての俺の問いに、鉢巻幸子は怪訝そうな顔をしながらも答える。

「その人は強打者揃いのメジャーリーグで、ノーヒットノーランを達成した偉大な人だ……隻腕っつーハンデを乗り越えてな」

「……」

「そんな人がこの世には確かに存在するんだ。女だからどうしたよ？体と骨格が違うだけで同じ人間だろうが」

まあ、俺が言いたいことはそういうことだ。

身長が170未満のプロの投手がいたり、体に病や爆弾、欠陥を患って尚活躍する選手がいるように、野球に限ることではないが、スポーツは身体能力が全てではない。技術とやり方次第で十分活躍できるのだ。

確かに女は身体的に男に劣るかもしれない。だが、それを理由にやりたいスポーツを諦めて欲しくはない。やりたくてもやれない奴が、この世にはいるのだから……

「それに、早川の投げる球は充分男にも通用するぜ？」

やり方次第だがな……心の内で語尾にそう付け加え、誇示するように早川の頭に手を置き挑発するかの如くニヤリと笑みを浮かべる。鉢巻幸子はそんな俺を敵意の込められた目で睨み付けると、心を鎮めるかのように吐息を吐き出し、此方を馬鹿にするように鼻を鳴らす。

「……フン、まあいいわ。どうせすぐに現実を見ることになる。だから精々、頑張ることね。」

野球が駄目だったらソフトボール部に拾ってあげるから」

「大きなお世話よ！」

最後に憎まれ口を叩き、颯爽と踵を返す鉢巻幸子に、早川は声を荒げる。

あれを一種のツンデレと思うのは俺だけだろうか？ふと、鉢巻幸子の背中に旧友であった天才を思い出しながら、早川の頭に置いた手をポケットにしまう。早川は去っていく背中をしばらく睨むように見つめた後、急に視線を此方に向け苦笑を浮かべる。

「……折角来てくれたのに見苦しい所見せちゃったね。それと、さつきはありがとう、仙道君」

「まあ成り行きってやつだ。気にすんな」

「それでも、ありがとう。本当は不安だったんだ……ボクの球は本当に男の子達に通用するのか。」

女であるボクが野球をやってもいいのかな、って。だけど、君の言葉でちよっぴり勇気が湧いてきたよ」

そう言って、今度は苦笑ではなく、柔らかな微笑みを浮かべる早川。その微笑みに、不覚にも俺の胸はドキリと高鳴る。

おいおい、凄え可愛いじゃねえか。柄にもなくときめいちゃったよ。そんなことを思いながら、俺も早川に微笑み返す。俺の頬が熱くなっている気がするが、きつと気のせいだ。

「そうかい。ならそいつは良かったな。」

尤も、俺は個人的な感想を言っただけにすぎない。通用するかしないかはお前次第だからな」

「わかってるよ。君の期待に応える為にも頑張るよ」

そういつて早川は表情を引き締めて、小さくガッツポーズをする。その後、ふと何かを思い出したような表情で此方を見上げる

「それにしても、まさか言ったその日に来てくれるとは思わなかったよ。」

やりたくないってまで言ってたから来ないと思ってたから」

「ん〜、まあ暇だったし見るだけな。それに野球愛好会キャプテンとやらを見てみたいし」

早川の疑問に軽く答える。

甲子園なんて大言を吐くんだ。どれほどの実力が見極めさせて貰おう。

「ふ〜ん。じゃあ、小波君が来るまでキャッチボールでもしてようか」

あのミスター・ユニフォームの名前は小波っつーのか……ってか早

川。いつの間にグローブ二つとボールを用意したんだ？

「いや、今見るだけって……」

「いいからいいから。あ、右でいいよね？」

「お、おう」

「じゃあ、ハイ」

笑顔でグローブを片方押し付けられ、反射的に受け取ってしまう。

初対面時も思っていたことだが、随分と勝ち気な女子だな……

距離を取る為離れていくおさげを見てそんなことを考えながら、鞆を置いて上着を脱ぎ、とりあえずグローブを左手に嵌める。

そして、自分の手に若干合わないグローブに不快感を覚えながらも、準備完了と片手を挙げ伝える。

それを合図に早川は体全体を伸ばすように、ゆっくりと球を上手から投げる。

投げられたボールは低い放物線を描いて俺の構えた所に丁度収まる。俺も縫い目を指先で確認し、肘が少しばかり不安だがそれを悟られないように投げ返す。

ボールは、同じ様に早川の構えた所丁度に収まった。

それを少しずつ距離を広げながら、肩が温まるまで繰り返す。

肘の状態は良好。コントロールはまだそれ程鈍っていないらしい。

懐かしいボールを取る感触と、投げる感触。

それらに少しばかり興が乗ってきた俺は、ある程度距離が離れた所でその場にしゃがみ、キャッチャーの体勢をとる。

「仙道君？」

「早川、アンダーで投げてみ」

「え？でも……」

「俺は昔キャッチャーもやってたから問題無い」

早川は少し迷うような素振りを見せるも、ネットよりキャッチャー相手に投げたかったのだろう。

すぐに顔付きを変えて、セットポジションを取る。

「じゃあいくよ」

そう言つてノーwindアップからのアンダースロー。

今朝俺が言ったことを意識してくれているのか、踏み込みは大きく重心は低い。

放たれたボールはズパーン！！と快音を鳴らし、グローブに収まる。

久々のキャッチングだが、問題無く芯で捕れる。

体は覚えているということか。惜しむらくはミットじゃないってことだな。

そんな事を考えながらボールを返球し、再び構える。

早川もボールを受け取るとすぐにセットポジションを取り、再度グローブに投げ込んでくる。

投げる、捕る、返す。投げる、捕る、返す。それを規則正しいペースで繰り返す。

早川の様子を見てみると、彼女は気分良さげにのびのびと投げている。

やはりキャッチャーがいるといたないとは投げ込みの気分が全然違う。

うのだらう。

俺も経験したことだからよくわかる。

それにしても、実際捕ってみるとなかなか良い球投げるな……球速こそ速くはないが、回転は綺麗だしキレもある。加えて、俺が構えたところにそれなりに投げ込めてるから、コントロールも人並み以上。

これで変化球が組み合わせれば、リード次第ではあるが化ける可能性もあるかもしれない。

だからこそリリースポイントの高さが気になる。

これでもっと低くから投げれば、男でもそうそう打てない球になりそうなんだがな……

「……ふむ、やっぱり足腰と体幹が弱いみたいだな……」

「え？」

どうやら考えていたことが口に出てしまったらしい。

足を上げようとしていた早川は動きを止め、不思議そうに此方を見る。

うーん、練習にまで口出ししていいものなのか……まあ忠告程度ならいいか

「戯言程度に聞き流してもらって構わないが……」

そう前置きをしておき、俺は自分の考えを伝える。

「足腰と体幹が弱いから体が沈みきらず、リリースが高くなってい



る。

アンダースローはリリースが低ければ低いほど真価を発揮する。だからやるんなら投げ込みより先にまず走り込みだ。

勿論、感覚を忘れない程度には投球練習もしたほうがいい。まあ、優先順位の問題だな。

お前はフォームは綺麗だし体も柔軟だ。その欠点を無くせば男でも簡単には打てない球を投げれるようになるぞ。

ああ、後コースによって踏み込む足の位置が変わってるから、そこも直した方がいいな」

そう偉そうにつらつらと言葉を並べ、ボールを返球する。

早川はキャッチするも、何やら啞然とした様子で此方を見ている。

「……………どうした？」

「え？あ、いや、なんでもないんだけど……………」

「何そんなに慌ててんだよ……………」

「べ、別になんでもないよ」

「そうか？」

「そつだよ」

『……………』

そこで会話が途切れ、なんとなく気まずい空気がその場に流れる。

この空気は俺が苦手なものだ。

だが、早川はこの空気を打破する気は無いらしく、その形の良い顎

に手を当てて、何やら考え事を始めてしまう。

こうなれば俺は完璧に手持ち無沙汰だ。

話しもキャッチボールの相手もいなく、ボールを早川に返してしまつた為弄る物も無い。

グローブが手に嵌つてはいるが、人のものを下手に弄る訳にもいかないだろう。

本格的にやることが無く、もういつその事帰ろうかな、と思ひ始めた時だった。

「お〜い、あおいちゃ〜ん！」

この学校では珍しい男の声がグラウンドに響く。

内心安堵しながらそちらの方に目を向けてると、ユニフォーム姿の男二人が手を振りながら此方に向かって走つてきていた。

片方は身長は平均よりちよつと高い、黒髪短髪の多少童顔の男……  
つーかミスター・ユニフォーム。

もう片方は身長は平均よりちよつと低い、丸眼鏡を掛けた男。こつちは面識がないのでよく知らない。

そんな感じに、いきなり出現した二人の観察をしていると、二人は既に早川の傍にまで来ていた。

二人の存在に気付いた早川は、頬を膨らませて2人を責める。

「遅い！もうとつくに練習始める時間過ぎてるよ！」

「ごめん、掃除が思ったよりも長引いちゃって……」

「それなら仕方ないけど……次からはなるべく早く来てよね」

「うん、わかつたよ」



顔を真っ赤にして両手を上げながら眼鏡君が怒るが、彼の漫画のよ  
うな語尾に笑いのツボにがちり入った為、なかなか笑い止まない。  
そして、そのまま笑い続けて数分。漸く笑いが止んだ。

「ヒー、ヒー、わ、悪い悪い。あまりに特徴的な語尾だったからつ  
い、な。

ああ、腹痛え」

「失礼な奴でやんすね！あんた誰でやんすか！？」

「ああ、紹介が遅れたな。

俺は仙道恭志郎。早川のクラスメイトだ」

憤り露にしている眼鏡君に問われたので、俺は気軽に名乗る。  
すると、ミスターユニフォームと眼鏡君は何やら思案顔になる。

「仙道恭志郎……どこかで聞いたような……」

「オイラも何か引つ掛かる感じがするでやんす」

そのまま首を傾げて唸る二人。

もう完璧俺の存在無視されてるな……

「おーい、俺は名乗ったぞ。まさか名乗ってくんねえのか？」

俺が声を掛けると、2人は思考の海から帰還し我に返る。

「ああ、ゴメン。」

俺は小波強<sup>こなみつよし</sup>。野球愛好会でキャプテンをやらせて貰ってるよ。よろ

しく」

小波は謝罪を入れて名乗り、手を差し出してきた。差し出された手を無視するわけにもいかないの、俺はズボンで軽く手を拭い、ガツチリと握手する。

そこで、俺は握った手からあることに気がついた。

随分とゴツゴツしている……コイツ、相当振り込んでるな……

そう、ミスターユニフォームの掌はマメだらけで所々が固くなっていたのだ。

マメというのはスイングすればするほど固くなるモノなので、コイツは随分な数のスイングをこなしてきたのだろう。

しかし、おかしなところにマメがあることから、スイング時に余計な力が入っているようだ。

そこまで考察した所でお手を離し、視線を眼鏡君に移す。

眼鏡君は俺の視線を受け止めると、待ってましたと言わんばかりに胸を張り、堂々と名乗る。

「オイラは俊足巧打のスーパールーキー、矢部明……」

「彼は野球愛好会の掃除番長の矢部明雄君だよ。たまに妄言を吐いたりしたりするけど、基本的には気にしないでね？」

「オーケイ、わかった。それじゃあよろしくな、掃除番長」

「掃除番長じゃないでやんす！あおいちゃんヒドいでやんす！」

情けない声を出す矢部に、皆が笑う。

そこでふと、3人付き合いの浅い自分がこの空気に既に馴染んでい

ることに気付き、少しばかり驚く。  
それは俺がどうこうというわけではなく、恐らくこいつらの人徳がなせることなのだろう。

両手を上げて怒る眼鏡君と、それを見て楽しそうに笑っている2人を見てそう思う。

面白い奴らだねえ。好感が持てるよ。

そう思いながら、俺も自然と笑う。

そして、皆が一頻り笑い終えると、小波が何かに気付いたかのように俺に視線を向けてくる。

「それで仙道は何でここにいるんだ？まさか入部希望者！？」

期待にキラキラ……否、キラキラと目を輝かせる小波に若干引きながらも、俺は肩を竦ませて答える。

「残念だが違うのよな。俺は唯の見学だ」

「そっかあ……」

残念そうにガツクリと肩を落とす小波。しかし、すぐに顔を上げるとニカツと笑みを見せる。

「まあ、やりたくなったらいつでも言ってくれ。歓迎するからさ」

「やりたくなったらな」

そ真っ直ぐな笑顔に俺は苦笑しながら肩を竦める。

その後軽く交流を深めるべく談笑をし、それからようやく練習を始

めるのか、皆がグラウンドの隅へと移動を始めた。

「じゃあ練習始めるけど、仙道は……」

「俺は見学しにきただけだからな。気にせず頑張ってくれ」

「そうか。じゃあ二人とも並んで」

小波が言葉に、二人は小波を先頭に横に一列に並ぶ。

「気をつけ！礼！」

『お願いします（でやんす）！！』

そして、グラウンドに向かって頭を下げる。これが練習開始の合図らしい。

それから三人は、ランニング、体操、ダッシュ、キャッチボールと、体を十分にほぐした後、各々別の練習をし始めた。

一人一人が自分に必要だと思っ練習をするという方式らしい。

まあ、人数が少ないので連携やノック、フリーバッティングやロングティーなどの集団練習が出来ないから、自然とこのような方法になるのだろう。

そんなことを考えながら、練習風景をのんびりと見学する。

早川は俺が言ったことを気にしてか走り込みをしており、小波と矢部はティーバッティングをしている。

そして、それからしばらく時間が経った後、走り込みを終えた早川はストレッチを始め、小波はネット目掛けてのピッチング。矢部は素振りを始める。

どうやら小波もピッチャーらしい。

まあ、ピッチャーはいくらいても困るモノじゃないからな。  
寧ろ甲子園を本気で目指すなら、最低でも三人は欲しい。

理想は先発を一人。

先発と中継ぎを兼用できる奴を一人。

中継ぎを一人、といった所か……

なんとなくそんなことを考えながら、俺は小波のピッチングを見ることに。

右のオーバースローから繰り出される直球がネットに吸い込まれる。球速は120後半ぐらいで、コントロールはあまり良くない模様。その証拠に、数球に一球はワンバンを投げたり、ネットより上を投げていた。

そのピッチングを見ながら、俺は少しばかり考える。

確かにピッチングもバッティングも、中学上がりには並よりは上なのだろうが、総じての感想はというと……

「中学の県大会……いや、地区大会クラスって所か……」

少し前までは中坊だったのだから仕方ないのだろうが、甲子園どころか明らかに全中（全国中学校体育大会）の水準すら下回っている。こんなんでよく甲子園に行く、なんて大言が吐けるな。  
結局口だけの奴だったってことか……

「なあ、仙道。ちょっと俺のフォームの悪いところ言ってくれないか？

見た感じでいいから」

勝手なことだが少しばかり失望していると、小波が俺に意見を求め



てくる。

それに俺は、手をヒラヒラと振りながら淡々と答える。

「軸足の軸がぶれてる。そのせいで足を上げた段階で右肩が下がり、踏み込む時に軸足に体重が残って、体重移動がスムーズにできない。後、体の開きと踏み込み足の着地が速いから、胸の張りが不十分。ついでに、腕のテイクバックが小さいし投げる時の肘の位置が低い」

「じゃ、じゃあどうすればいいんだ？」

「まず、膝を使って軸足の軸を安定させる。

グローブを壁に見立てて体の開きを抑えて、踏み込みは着地を粘る。最後に、胸を思いつき張り張って気持ち肘を上げて投げてみる」

つらつらと並べられる欠点に怯む小波に、俺は大雑把にだがアドバイスする。

本当はもっと細かい修正点がいっぱいあるのだが、面倒なのでカット。

「よし、わかった。じゃあもう一回やってみるから見ててくれ！」

そう言っつて小波は傍らに置いてある箱からボールを一球掴み、張り切った様子で大きく振りがぶる。

こんなアドバイスで修正されるんなら、誰も苦労しねえんだがな……

フォームというのは本来、時間をかけて少しずつ修正、改良していくものだ。

慣れ親しんだフォーム、そして体に染み付いた癖を直すことは難しいことだし、一つを直せばまた違う欠点があるからだ。例え

ば、軸足に体重を乗せようと足を高く上げて、そのせいでバランスが崩れて軸がブレる。力を出すために腰を思いつき捻りすぎて、いざ投げる時に捻った反動が強くて体が開いてしまっ、などなど。故に、フォームを直す時は、体に覚えこませるようにゆっくりと反復練習するのがベターなのだ。

それを、アドバイスだけ聞いて修正できると思っているのならば、それはとんだ愚か者だ。

俺は内心で呆れたように溜め息を吐きながら、半ば投げやりに小波のピッチングを見ることに。

そして俺は、度肝を抜かれる。

小波は動作を確認するかのようになり、ゆっくりと足を高く上げる。

その時に、膝を上手く使い軸足を安定させているため、上体も下体も安定している。

そこから、体を沈み込ませ力を蓄え、腕のテイクバック時にグローブを壁にしながら体重を移動させ、着地を粘らせ踏み込む。

そして、胸を大きく張り、肘から腕を出し鞭のようにしならせて腕を振る。

指先から放たれた球は先程までとは比べ物にならない速さと威力で、ネットに突き刺さる。

「ッ!？」

その直球を見て俺は驚愕に目を見開く。

少し教えただけで各段に投球が良くなりやがった……ありえねえ、なんつー理解力と吸収力してやがる……コイツ……

「一応アドバイス通りにやってみたけど、どうだった仙道？」

自分ではさっきより大分良くなったと思うんだけど……」

「あ、ああ。大分良くなったぞ」

「本当か!？」

自分の投球が上手くなったことに大袈裟に喜ぶ小波。その姿に俺は親友の姿が重なって見え、無意識に右肘を押さえる。

だが、俺は先程の光景が信じられず、もう一回小波を試してみることに。

「だが、まだまだ改善の余地はある。さっきお前は足全体で踏み込んでいたが、今度は踵からそつと踏み出してみな。そうさな……軸足に乗せた体重のうち二割くらいの力で着地つてどこか。

そうすりや体が詰まらなくて体重移動がよりスムーズになるし、球持ちが長くなって、ストレートの威力が増すぞ。勿論さっき言ったことは忘れるなよ?」

「わかった。じゃあもう一回見ててくれ」

そう言つて再び箱からボールを取り出し、小波は振りかぶる。見極めてやる。お前の才能が嘘か真かを……

小波はゆっくりと足を高く上げ、先程と同じ様な流れでフォームを形成する。

そこには最初に見た、体の動きがバラバラのフォームの面影すらない。

そして踏み込みを踵から入り、それにより先程より体重移動をスムーズに行われ球持ちが長くなり、リリースがより前でされる。

放たれたストレートは先程よりも球威が増していた。

「おいおいマジかよ……」

それを見て俺はもう啞然とするしかなかった。  
見事小波は、俺のアドバイスを聞いただけでフォーム修正に成功したのだ。  
最早驚きで頬が引き攣っているのが自分でも分かる。

「お、いい感じ!」

当の本人は暢気に喜んでいる。その姿を見て俺は脱力する。  
もうこれは認めるしかない。コイツは本物だと。  
しかし、それだと妙に思う。

これだけの理解力と吸収力があるのに、何故あのようにバラバラなフォームだったのだろうか?

普通なら綺麗、とまではいかなくても纏まったフォームになるはずなのだが……  
気になった俺は、小波に尋ねてみる。

「……なあ、小波。お前ってどこ中出身だ?」

「俺?俺はパワフル第一中学だけど……それが?」

「そこって野球強かったのか?」

「うん……昔は強かったらしいけど俺達の代は弱かったな。指導者に碌なのいなかったし、設備は悪かったし、先輩が引退してから皆やる気が無くなってたし」

当時を思い出すように首を傾げながら答える小波に、俺は納得がいったように頷く。

成る程ね……これほどの理解力と吸収力があって無名なのはそのせいか……マトモな指導者の下で練習してりゃあもつと伸びてたかもしれねえのに……

埋もれてしまっていた才能を少しばかり哀れに思う。

「そついう仙道はどこ中出身なんだ？」

「俺？俺は宵越中学だな」

「宵越中学……どつかで聞いたことあるような……何だったっけな……」

何か思う所があつたのか首を傾げる小波。

俺は直感的にだが、アイツと初めて出会った時のような感覚をさつき小波に感じた。

そのせいだろうか……あの投球を見てから、どうにも俺の右腕が疼いてしょうがない。それも今朝のような、ソフトボール部の練習を見ていた時に感じたような不快なモノではない。

全力でボールを投げたい。

全力でボールをかつ飛ばしたい。

そんな欲求が右腕から俺を支配していた。

「……小波。少しいいか？」

そして気付いた時には、俺は小波に声を掛けていた。

「ん、何だ仙道？野球愛好会に入ってくれるのか？」

「いや違……そうだな、お前がある条件をクリアすれば考えてもい

い

ああ、俺は何を言っているのだろうか……

まあ、こうなったら仕方が無い。欲望に身を任せることにしよう。胸中で言い訳するようにそう呟き、俺は口元に笑みを浮かべる。

「本当か！？で、その条件は！？」

俺はマウンドを指で指し、その条件を教える。

「俺と勝負してお前が俺の球を打てたら、入るのを考えてもいい」

「本当だな！？よし、やるぞー！」

小波はグローブを俺に渡すと、バットを持って意気揚々と右打席に入っていく、俺は放置されていたネットをストライクゾーン後方に置いて、ボールを5球ほど拝借し、マウンドに上がる。

あまり整備されていない、そもそも即興で造られたのであろう、ただ周りより土が高くなっているだけのようなマウンド。

だが、それでも半年ぶりに上がるマウンドだ。俺にとっては些か感慨深い。

持ってきたボールを5球置き、土の凹凸になっている所を軽く足で均す。

肩は早川とのキャッチボールで温まっている。

スパイクじゃないが、これはあくまで力試しだ、別段問題無いだろう。

万が一負けたとしても、俺は入るとは断言していないから問題無い。ある程度土を均した所で、バッターボックスに入った小波に視線を向け、勝負内容を宣言する。

「勝負内容は一打席勝負。  
ヒット性の当たりが出たらお前の勝ち。  
三振か凡打だったら俺の勝ち。  
不服なら三打席勝負でも構わないが?」

「いや、一打席でいい」

「そうかい」

確認が取れた所で、俺は念の為軽く筋を伸ばし始め、小波は様々なコースを想定した素振りを始める。  
そこへ、騒ぎを聞きつけたのか、眼鏡君と早川がやってきた。

「何が始まるでやんすか?」

「どうしたの?何で仙道君がマウンドに上がってるの?」

二人の問いに小波が素振りを止めて答えているのを視界の端に収めながら、俺は集中力徐々に高めていく。

「小波君!絶対勝ってね!貴重な戦力確保のチャンスだよ!!」

「う、うん。頑張るよ」

「あおいちゃんが何か怖いでやんす」

「何か言った、矢部君?」(ギロツ)

「な、なんでもないでやんす」

何か向こうでコントみたいなのをしているが、気にせずただ黙々とストレッチをし続け、体が十分ほぐれた所で始めるとする。

「さあ、やるとしましうか」

「よし！来い仙道！」

応えて数回素振りをした後、張り切って構える小波。

折角ギヤラリーがいるんだ、少しばかり場を盛り上げようか。

久々のマウンドに興が乗ってきた俺は、ボールを1球拾い上げ、握りを小波に見せ付ける。

「先に宣言しといてやる。俺は全球ストレートを投げる」

「何!？」

嘗められたとも思ったのか、小波は憤りを露わにしている。

パフォーマンスだから誤解されてもしようがないが、一つ訂正を加えるならば俺はストレートしか投げないんじゃない。

今の俺にはストレートしか投げれないのだ。

まあ、それを言ってもしょうがないし、ストレートだけで十分抑えられる自信がある故のパフォーマンスなのだが……

これで負けたら相当ダセえな……

そんなことを思いながら、黙って振りかぶる。

そして大きく踏み込み、腕を鋭く振るう。

放たれたボールは唸りを上げながらネットに吸い込まれ、ネットに突き刺さる



「ッ!？」

ネットに突き刺さったボールは、その威力により受け止めたネットを後方にズレらす。

小波は全く反応できなかつた。

ギャラリーの2人も驚愕の表情のまま固まっている

「1ストライク」

呆けている小波に宣告して、傍らに置いてあるボールを一球掴む。

小波が慌てて構えなおすのを確認し、再び大きく振りかぶり、投げる。

指先に集中した力が爆発し、ボールは風を切り裂きながらネット目掛けて突き進んでいく。

小波は今度はスイングするも、ボールの下を空振って2ストライク

「は、速いでやんす……」

「140kmは間違いなく出てるよ……」

ギャラリー2人は呆然と感想を述べている。

その空気は2ストライクと追い込まれた為か、些か暗い。

だが、追い込んだ俺には、少しばかり気になることがあった。

今のスイング、空振りはしたもののタイミングは合っていた……2球で俺のストレートにタイミングを合わせたのか……？

そう、奴のスイングは振り遅れることなく、俺のストレートの丁度真下を空振ったのだ。

俺のストレートは並の奴より大分伸びると自負している。だからこそ小波はボールの下を空振りしたのだろうか……

ボールを拾い上げ、縫い目を指先で確認しながら視線を小波に向ける。

「くっそー、今は惜しかった。でも次こそ打つ!!」

小波は悔しげながらも、瞳を輝かせ、笑みを浮かべていた。

この勝負が面白くて堪らないと言わんばかりに……

その表情と、記憶の中の親友の影が、一瞬重なる。

追い込まれたつてのに笑顔を浮かべるか……アイツそっくりだな。

キラキラとした目が、早く次ぎ投げると催促するかのようにな俺に向けられ、苦笑を漏らす。

流石に、これ以上嘗めてかかったらこっちが負けちまいそうだな……

直感的にそう判断した俺は、本気でいくために一旦タイムを取る。

「ちよつとタンマ」

いきなりのタイムに全員が肩透かしを喰らったかのような表情になるが、俺は気にせず視線を眼鏡君に向ける。

「なあ眼鏡君よお。君、足のサイズ幾つ？」

「オ、オイラでやんすか？27cmでやんすけど……」

突然話を振られた為か多少どもりながら答える眼鏡君。

27か……少しばかり小さいが、まあいけるだろ……

「じゃあ悪いけどスパイク貸してくんね？」

「いいでやんすけど……って、今までスパイクじゃなかったでやんすか!？」

眼鏡君の指摘に、周りは今気付いたと言わんばかりに俺の足に視線が注ぐ。

「つか、今気付いたのか？」

「踏ん張りの効かない普通の靴でアレだけの球威と球速なんて……」

「それでスパイクに履き替えたってことは、もっと凄い球が来るってことか!！」

早川と眼鏡君は愕然としているが、小波だけは更に目を輝かせている。

それを見て俺は確信した。やっぱりコイツはアイツと同種だと。俺は苦笑しながら借りたスパイクを紐を緩めて（そうしないと入らない）履き、土を爪先で叩いて調子を確認する。足のサイズが27.5cmの俺には少々キツイが、数球ぐらいなら支障も問題も無いだろう。

「よし、待たせたな。じゃあ決着といこうか」

「こい! 仙道!」

俺は獰猛な笑みを浮かべ、小波もそれに応えるように笑みを深める。そして、この空間を支配する静寂。

同じグラウンドで練習している筈の、ソフトボール部の声が嫌に遠

くに聞こえる。

ゴクリ、と唾を飲む音は誰が発したのか……

場の緊張感はピークを超え、ピリピリと俺の肌を刺激する。

その空気に俺は更に集中力を高め、全身の感覚を研ぎ澄ます。

いいね、最高のテンションだ。

久々の真剣勝負の感覚に、俺の体の内が熱くなっていく。

しかし力むことなく、寧ろリラックスした状態で、大きく振りかぶる。

奴さんは俺のストレートを打とうと躍起になっている。

高めのボールになる釣り球のストレート。もしくは力の抜いたストレートを投げれば十中八九空振るだろう。

配球を考えながら流れるような動作で足を上げる。

だが、それじゃあつまんねえ。実力を試すならとりあえずここだろう。

そして、大きく足を踏み出し、下半身から蓄えた力を腕に伝えていく。

ずばり、真ん中高めストレート！

肩から肘へ、肘から手首へ、手首から指先へ、指先からボールへ。力が間接を通過することに加速し、その力全てをボールに伝え、放つ。

放たれたボールは狙い通り高めのコースへ。

間違いない今日一番のストレート。

それを小波は瞬時に反応してバットを鋭く振り、奴もまた今日一番のスイングで芯に捉える。

勝利を確信してか、笑みすら浮かべている。

……しかし

勝利を確信しているところ悪いが、俺のストレートの真価は球速でも伸びでもねえ……

「なっ!?!」

甲高い音が響き、芯を捕らえていたはずのボールは緩い放物線を描き、そして、俺が構えたグローブの中に収まる。

俺のストレートの真価……それは重さにこそある

確かに小波のバットは芯を捉えた。しかし、俺のストレートの球威に押し負けてしまい、ボールをマトモにはじき返せなかったのだ。呆然とする小波とギャラリィに、ボールを手で弄びながら宣告する。

「俺の勝ちだな」

そう言ってカラカラと笑い、余ったボールをネットに拾い上げ、マウンドから下りる。

この勝負はとても楽しめた。

本音を言うならばまだまだ物足りないが、流石にこれ以上でしゃばるのは気が引けるし、なにより、これ以上したら俺が野球を止められなくなっちまう。それほどまでに、久々にした野球の勝負は楽しかった。

だからこそ、ここで自重しておく。

「す、凄いよ仙道君！」

「仙道君、一体何者なんでやんすか!？」

「うおっ! な、なんだ!？」

下りると同時に二人に詰め寄られた。

二人とも興奮しているかのように目をキラキラと輝かせながら、俺の顔を覗き込んでくる。

とりあえずその勢いが怖かったので、二人を宥めることに。

「あゝ、はいはい落ち着けご兩人」

「落ち着いていられないよ! あれ程の球を投げれる人なんて、高校でもそうそういないよ!」

「そうでやんすよ! 最初はおおいちゃんにフラグを立てようと目論む下心満々の男子生徒Aかと思ってたでやんすけど、実際は凄い人だったでやんす!」

「……………」

否定したいが強く否定できないこの悲しさ……

「ま、まあ俺のこたあいいから練習に戻りなっせ。

俺はそろそろ帰るからよ」

「え、もう帰っちゃうの? 折角だしまたボクの球受けてよ。

ついでにアドバイスも」

「小波君の仇はオイラが取るでやんす！  
仙道君、勝負でやんす！」

「ハハハ！人気者だねえ、俺。  
だけど、今日はもう疲れたから勘弁してくれや」

そう言いながら脱いでいた上着を羽織り、鞆を持ち上げる。  
もうやることねえし、長居は無用ってな。

そして、俺に嫌に絡んでくる2人を適当にあしらひ、そのままグラウンドから去ろうとする。

「仙道！！」

「ん？」

しかし小波に名を呼ばれたので立ち止まり、振り返る。

そこには、バットを俺に突きつけた小波の姿が。

小波はその体勢のまま、某巨人軍の星君よろしくまるで燃えるように輝いている目で俺を見据えると、大声で言い放つ。

「次は負けないからな！！」

「……………え、次？」

謎の宣戦布告。

俺はポカンと呆ける。

次なんてやる気ねえし、練習に立ち会うなんてことももう無いつもりでいたんだが……

かといって拒否したら面倒な状況になりそうなので

「まあ、気が向いたらな」

と、無難に返してはぐらかすことに。

そしてそのまま歩き去ろうとした所で、先程の勝負の時に感じたことを伝えておくことに。

「あゝそうそう。聞き流してもらっても構わんが……」

そう前置きしてから、俺は小波に視線を向ける。

「お前打つ時腰の開きが早い。そんなんじゃストレートは打てるも変化球に対応できねえぞ？もっと引き付けて堪えて打ってみ。そっちのが力逃げねえし、球の見極めもしっかりできるからな」

「おう、わかった！」

「そうかい。なら頑張れよ若人達よ」

要点だけ大雑把に伝えると、手をヒラヒラと振りながら、今度こそグラウンドから出て行った。

\*

あゝ、久々に投げたから疲れた。

これでもトレーニングは欠かしてなかったが、やっぱり投げ込まねえと鈍るモノだな



帰り道の途中にある商店街を歩きながら荷物を持ったまま軽くストレッチをし、胸中で一人ごちる。

運動後のストレッチを忘れていた為、帰ってからもする予定だが、今のうちに少しでもやっておこうと思ったのだ。

左肩に鞆を担ぎ、その手には先程買った野菜や調味料に、シャンプーや歯磨き粉に洗剤などの雑貨が入った袋を携えている。

俺はとある事情により一人暮らしなので、こうした物を自分で揃えなければならぬ。

部活をしていたら、買い出しに出掛けるのが難しくなるだろう。今にして思えばそれも野球ができない原因になっているかもしれない。そう考えることで、自分の中に沸き上がっている野球をやりたい衝動を抑え込む。

アイツが退院するまで野球は遊びはOK。でも本気は駄目。<sup>ガチ</sup>

それがあの時に決めた俺のルールだ。アイツが早く退院してくれれば、俺も野球をマジでやれるのだが……

「……………チツ」

そこまで考えた所で、俺は憎々しげに舌打ちをする。

それは野球を自由にできないことに対してではなく、自分のせいでアイツを入院させてしまったのに、自分勝手な思考をしてしまった己に対するモノだ。

恐らく今の俺の表情は、苛立ちと自己嫌悪によって大分歪んでいることだろう。その証拠に周りの人達は、俺が歩く先を道を譲るかのように避けている。

いかな。引越してきたばかりなのに印象悪くしちまったらマズイ。

ということ、思考を切り替えるために頭を軽く振り、顔に微笑を携えておく。

それにしても……

「初対戦で俺のストレートを捉える、か……」

思考を切り替えて真つ先に頭に浮かんだのはそのことだった。

真価は重さにあるとはいえ、速さにもそれなりの自信があった。

これでも中学時代、球速だけならあかつきの天才君とタメを張れる程だったし、ブランクがあるとはいえ身体能力的には衰えはない筈だ。

しかし、小波は力負けしていたとはいえ、芯でボールを捉えたのだ。腰が開ききって、力が完全に抜けきっていた状態で当たったからピッチャーフライになったものの、もしもあれがちゃんとしたスイングだったとしたら……

「追い込まれてから力を発揮する……やはりアイツと似ているな」  
誰に言うでもなくそう呟くと、俺はグラウンド方向の空を見上げながら笑みを浮かべる。

「小波強。もしかしたら化けるかもな……」

一人呟き、俺はそのまま振り返らずに帰路に着く。

その呟きに呼応するかのよう、グラウンド方向からキィイン、と甲高い音が空に鳴り響いた。

## 一話（後書き）

さて、どうでしたでしょうか？

一話目から長えよポケエ！とお思いでしょうが、そこは御勘弁を。  
興が乗りすぎたんです。

次からは大分短縮していきます。

感想、ご指摘、お待ちしております。

## 二話（前書き）

今回はわかる人にはわかるネタが入っています。  
分からなかったらググってね  
後、どうでもいいですけど名前の由来でも書いておきました。

### 【小波強】

小波 パワプロ製作会社コナミから  
強 パワフル〓意味：強い〓強

### 【仙道恭志郎】

仙道 スラムダンクの仙道さんから。格好いいですよね、あの人。  
恭志郎 インスピレーション

ちなみに恭志郎の容姿は、黒髪のオールバックで、目つきが若干悪いです。

## 二話

どたばたとした入学式から、少しばかりの時間が経過した。俺は高校生活というものを満喫している。

最近クラスの女子達とも仲良くなり始め、高校生活の滑り出しとしては好調な方であろう。

このまま順調にいけば、目標である可愛い彼女を作って青春する、という目標に案外早く手が届くのではなからうか？

そう考えると少しばかり気分が高揚してくる。

だというのに……

「なぐんで俺はお前らと飯を食ってるんだよ？」

何故か俺は小波と矢部と一緒に屋上で昼飯を食っていた。

高いフェンスの前にある段差に並ぶように腰掛け、各々が弁当箱を自分の横に置いている。

屋上は普段から誰もいないのか、それとも俺達男が使っているからか、誰もいなく、貸切状態だ。フェンスの網目から見える景色は、街を遠くまで見渡せてなかなか爽快感で、麗らかな日の光と心地よい春風も相まって最高のロケーションとなっている……隣に野郎ではなく女の子が座っていればの話だが……

というのも、昼休みに入り女の子を誘って飯でも食おうとしていた俺は、突如現れたこの二人に半ば強引に拉致られたのだ。普通に意味がわからない。

「まあまあ、男同士でしか話せないこともあるだろ？」

「俺は華が欲しいんだよ。華が」

「華ならここにいでやんす！」

「寝言は寝て言え腐れ眼鏡」

矢部の戯れ言を一蹴して溜め息を吐く。

何故女子の方が多い……というか、半ば女子高であるこの学校で野郎と飯を食わにやならんのだ。俺の青春はこんなモノなのか？

ガツクリと肩を落としながら、俺は弁当のおかずのアスパラガスのベーコン巻きを箸で摘み口に放り込む。うむ、我が腕ながらに美味しいな。

しかし傍にいるのが野郎な為、美味しさ三割減。

なんとなく憂鬱になり、空を見上げる。

そこには雲一つない快晴がどこまでも続いていた。

「あゝあ、こんな天気が良いんなら女の子でも空から降って来ねえかな……」

「お、落下型ヒロインでやんすか。なかなか通でやんすね」

「まあ、この際落下型ヒロインじゃなくても、義姉義妹義母義娘双子未亡人先輩後輩同級生女教師幼なじみお嬢様金髪黒髪茶髪銀髪緑髪伝説ロングヘアセミロングショートヘアボブ縦ロールストレートツインテールポニーテールお下げ三つ編み二つ縛りウェーブくせつ毛アホ毛セーラーブレザー体操服柔道着弓道着保母さん看護婦さんメイドさん婦警さん巫女さんシスターさん軍人さん秘書さんロリシヨタツンデレチアガールスチュウワーズウェイトレス白ゴス黒ゴスチャイナドレス病弱アルビノ電波系妄想癖二重人格女王様お姫様二ーソックスガーターベルト男装の麗人メガネ目隠し眼帯包帯スクー ル水着ワンピース水着ビキニ水着スリングショーツ水着バカ水着人

外幽霊獣耳娘とかでもいいんだけどねえ……」

「多っ！この青空に何を求めているでやんすか！？というか、一個明らかに女じゃなかったでやんすよ！？」

「仙道！何でそこに野球好きが入っていない！？」

「小波君ツッコミそこでやんすか！？というか何でやんすかその新ジャンル！？」

「野球好きか、コイツは新しい。だとしたら俺はピッチャーを希望する」

「俺はキャッチャーだな。受け止めて貰いたい、俺の全てを」

「ああ、ツッコミが追いつかないでやんす！」

はて、今無性に髪を青く染めてピアスをしたくなったんだが……  
それと、小波が何やら「別世界なら大体攻略できるな……」とか呟  
いているが、いろんな意味で大丈夫なのだろうか？まあ、きつと大  
丈夫だろう。

そんな感じに空間が大分力オスなことになってしまっていると、屋  
上の少しばかり錆び付いた鉄の扉が開く音がした。

「ごめん、遅くなった！」

「あ、あおい、待って……」

そして聞こえてきた女子の声に、イチロー張りの反射神経で視線を  
向ける。

そこには袋片手に駆け寄ってくるおさげの女の子……早川と、その少し後ろから小走りで早川を追う、長い茶髪の如何にも清楚なお嬢様、といった感じの女の子がいた。

「華キタアアアアア！！」

「キャッ！」

「ちょっと仙道君！はるかが怖がってるでしょ！」

「おっと、こいつは失敬」

どうやら俺の心の叫びがそのまま外に出てしまったらしい。

その叫びに恐怖してしまったのか、女の子は早川の背後に隠れて此方を恐々と見つめている。

確かに此方に非はあったが、流石にそんなリアクションを取られると傷付く……

軽く落ち込みながら、ふと視線を早川の背後に隠れている女の子に向けてみると、彼女と目が合う。

そこで俺は、その彼女の姿に見覚えがあることに気付く。

「ん？あんたは確か、新入生挨拶をしていた……」

「あ、ハイ。わ、私は野球愛好会のマネージャーを務めさせてもらっている、七瀬はるかと申します。よ、宜しくお願いします」

「七瀬ね。オーケイ、覚えたぜ。

俺は仙道恭志郎ってんだ。宜しく」

そう言っつて早川の背後から挨拶してくれた七瀬に、片手をヒラヒラ



と振って軽く返す。

まだ隠れっぱなしってのは気になるが、まあ返事してくれただけよしとしよう。

「はるかにはボクの一番の親友なんだ。だからちょっとかいなかだしたら許さないから」

「いきなり釘刺された……信用ないねえ」

「さっきのを見たら当たり前だと思っけど？」

「……」

返す言葉もありません……

ジト目で此方を見てくる早川から視線を逸らし、誤魔化すかのよう  
にぎこちなく笑っておく。

「まったく……」

早川は一つ呆れたように息を吐くと、持ってきていたシートをその  
場に敷き、その上に七瀬と腰を下ろす。うん、何となくお嬢様っぽ  
いね、こういうの。

男は普通に地べたに座るからねえ……

まあ、そんなことはいいとして、折角華も来たことだし、俺は食事を再開する。心なしが先程より弁当が美味く感じる。七瀬は重箱の小さい版のような弁当を出し、早川は持っていた袋から購買で買ったのであるうパンを取り出す。それを見た俺は、無意識に眉間に皺を寄せ、早川に声を掛ける

「おい、早川。それ、まさか昼飯か？」

「うん、そうだけど……それが？」

「んな栄養バランスが偏ったモン食って体力が付くかよ。スポーツマンにとって栄養管理は基本だぞ？いや、お前の場合はスポーツウーマンなのか……？」

「いや、そこはどうでもいいでしょ……」

呆れた様子でツツコム早川を無視して、俺は言葉を続ける。

「とにかく、だ。今は体力付けなきゃいけない時期なのに、そんなモンばっか食ってたら付く体力も付かねえぞ？だからせめてこんぐらいは食って欲しいな」

そう言っただけ俺は自前の弁当を早川に突き出して中身を見せる。

「美味しそう……これはキミの親御さんが作ったの？」

「残念、これは俺自作の弁当だ。しっかりと栄養バランスが考えられており、なにより安上がりで美味い」

自慢気に弁当を見せびらかす。

だが、皆から帰ってきたのは疑いと驚きの目。

「んだよその目は……」

「いや、仙道君が料理出来るのが意外で……ちょっとイメージが、

ね……」

「言ったな早川？ならば我が一品をご賞味在れ！」

そう言つて俺は早川に弁当をズイツと突き出す。

腕によりをかけたおかずの数々。

それに早川は少し迷つた素振りをした後、おかずの一つを指で摘み、口に運ぶ。

そして数回咀嚼し、顔を綻ばせる。

「美味しい……」

「ハツハア！だろお？一人暮らしに料理スキルは必須技能だぜい？」

「ん？仙道つて一人暮らしなのか？」

俺の言葉に反応して小波が飯を食いながら聞いてくる。

「おう、そうだぞ」

「両親は？」

「あれでやんすか？ラブコメでよくある、両親とも海外旅行に行つてるとかそういうのでやんすか？」

矢部がニヤニヤと笑いながら俺を見てきたので、俺は一瞬だけ言葉を考え、答える。

「ん、海外ではないが、上か下かにいつてるな」

「上？下？北海道か九州にでも行ってるのか？」

「……まあ、遠くにいることあ違いねえわな。それよりホレ、お前等も食ってみるか？」

流れを打ち切り、持っていた弁当を隣に座っている小波達に向ける。予想通りと言うべきか、反応を見せる小波と矢部

「お、いいのか!？」

「おう、恭さん特製の手料理だ。食って俺を賞賛しろ」

「それじゃあ、いったただつきまゝすでやんす!!」

いつのまにか俺に接近していた矢部は俺の弁当を引つたくり、遠慮のえの字も知らぬかのように食い始める。それに小波も便乗し、俺の弁当の中身はどんどんと減っていく。

「あ、てめえら、この、取りすぎだバカヤロウ！俺の分が無くなるだろうが！」

「うまいっ！止められない止まらない！」

「美味しいでやんすゝ！箸が進むでやんすゝ！」

「あ、じゃあボクももう一個もゝらいつ」

「お前ら俺に残す気微塵もねえな!？」

そんな感じに早川も加わり、何故か俺の弁当の争奪戦に始まってし

まう。しかしそんな中、七瀬は先程俺の言った言葉の意味に気付いてか、顔を青ざめさせ、憐憫な視線を俺に送ってくる。それに気付いた俺は軽く苦笑を見せて、そのまま争奪戦に戻る。

上か下かにいつてる……天国か地獄かに逝つつて……つまりは俺の両親は他界しているのだ。俺がまだ幼い頃に交通事故に遭って……まあ、それを言っこの場の空気をパーフェクトフリーズさせたくなかったから、嘘は言わずに適当にはぐらかしたのだが……

七瀬も俺に気を利かせてか、それ以降は争奪戦を微笑ましそうに眺めていた。

「はあ、食った食った」

「もうお腹いっぱいだよんす」

「おいしかったよ、仙道君」

「……お、俺の昼飯……」

それから少し時間が経ち、皆はご満悦の表情で俺は一人だけ頂垂れていた。

理由は簡単。彼らが勝者で、俺が敗者だからだ。

戦闘中に一瞬とはいえ目を切ったことが、勝敗を分けてしまったらしい。

……まあ、早川の笑顔が見れたから良しとしておこう。

可愛い娘の笑顔は活力剤。

そう考えることにより、敗北のダメージを軽減させる。

何事も切り替えが大事なのさ。野球にしる私生活にしるな。

「あ、あの、仙道さん……」

「ん〜？」

「よかつたら、コレ……」

視線を七瀬に向けてみると、そこには少し小さめの弁当箱に入ったおかずの数々。和食を中心としており、そのどれもにとても手が込められているのが見てわかる。

「……貰っていいのか？」

「ハ、ハイ。私はあまり食べる方じゃないので……それに、その、少し可哀想だったので……」

美少女に同情で飯を恵んで貰う…… *pricerres*

これは男としてどうなのだろうか……俺にも譲れないこの儂いプライドというものが……

そこまで考えた所で腹が鳴る。中途半端にしか食っていないので、空腹感が増しているようだ。

……

「お、マジで？ありがてえ！じゃあ遠慮なく、いただきます」

プライドは投げ捨てる物（キリッ

七瀬の優しさに感謝しながら両手を合わせて会釈し、早速食べてみ

る。

「おお、美味しいな！これはアンタが？」

「いえ、私の母が……」

「へえ、いい腕してるねえ。羨ましい」

料理の腕にはそれなりに自信があったんだが、これに比べたらまだまだだと実感させられる。

味わいつつも、盗める技はないかと模索し、黙々と食べ続ける。そうしていく内に、気付いたら完食してしまっていた。なので、両手を合わせて深々と会釈する。

「ご馳走さん、大変美味しゅう御座いました」

「ハイ、お粗末様でした」

微笑む七瀬に微笑み返し、一言ありがとうと礼を言って、持ってきていたペットボトルに入ったお茶を飲む。

口の中に広がる渋味が、食後の余韻を引き立たせてくれる。

「さて、と」

ペットから口を離し一息吐くと、俺は居住まいを正してその場の面々の顔を見渡す。

「飯も食い終わったことだしそろそろ用件を言ってくんねえか？野球愛好会の面子が勢揃いしてんだ。何かあんだろ？」

「……」

「先に言っておくが、俺は選手になるつもりはねえぞ」

「仙道……」

場にいる皆を代表して、小波は俺の目を真っ直ぐ見据えながら口を開く。

「俺達の、コーチになってくれないか？」

「……は？」

耳に入ってきた言葉の意味を理解できず、俺は呆ける。

それから半拍程で我に返り小波の顔を真っ直ぐに見据える。その顔は至って真剣で、冗談を言っている風にはとても見えない。他の連中もそうだ。

「……何故にコーチ？」

「今の俺達には指導してくれる人がいない。そして俺達はまだまだ未熟だ。こんな状態で大会に挑んでも、甲子園どころか間違い無く地区予選で負ける」

うん、現状はそれ以前の問題だと思っぞ？

そう思うが口には出さない。

俺とて流石に空気を読むことぐらい心得ているぞ。

小波はそこで一息入れ、話を続ける。



「だから、強くなるにはちゃんとした指導者の下でやった方がいいけど、この高校にそんな人がいるとは思えない。そんな時に来たのがお前だ」

「俺？」

俺が自分を指差しながら首を傾げると小波は一つ頷き、その後を早川が引き継ぐ。

「野球経験者で且つ知識も豊富。更に指導力も高いキミはコーチとしては適任だと思うんだ。」

これは昨日、キミからアドバイスを貰った時に考えたことなんだけどね」

「お前が野球をやりたくないってことはあおいちゃんから聞いた。でも、昨日の様子を見るに野球が嫌いってわけじゃあないんだろ？」

「まあ、そりゃあな……」

寧ろ好きなくらいだ。

「ならお願いだ！選手になってくれとは言わない。けど、俺達が上手くなる為にも協力してくれ。頼む！」

「お願いするでやんす！」

「キミの力を貸して！」

「御願致します！」

野球愛好会の面々は、三者三様の言葉で俺に頭を下げってくる。これで断ったら完璧悪役になっちまうな、などと頭の片隅でぼんやりと考えながら、俺は思考する。

俺はアイツがグラウンドに戻ってくるまで、本気で野球をしないと決めている。

だが、コーチとしてならどうなのだろうか？

俺自身が野球をするわけじゃないし、尚且つ野球に携われる。一石二鳥じゃないか。

ピッチャーとしての楽観的思考でそこまで考える。

成る程そう考えればいいこと尽くしだな。

しかし、キャッチャーとしての冷静な思考で考え直してみる。

いや、コーチに必要な条件が俺に備わっているかわからない。

指導理念、指導手順、価値観、プレーヤスキルに対する考え方が明確かどうか……etc.

これらがキチンと備わってなければ、チームを強くすることは難しい。

確かに後輩達にアドバイスする程度はやってきていたが、それがチーム単位となれば話は別だ。

指導一つで、チームが強くも弱くもなるし、選手を活かすも殺すも俺次第ということになってくる。

幸い人数が少ないから何とかかなりそうではあるが、中途半端な気持ちでやれば最悪の結果を招いてしまうことは火を見るよりも明らかだろう。

ふむ、常に前向きなプラス思考でいなければならぬピッチャーと、常にマイナス思考で最悪な展開を想定し、それを避けるべく配球を考えるキャッチャー。

プラスとマイナスで『バッテリー』とは言い得て妙だな。

そんなどうでもいい感想を息抜きがてらに胸中で述べながら、楽観的思考と冷静な思考の両方を纏めて、考え直す。

そしてしばらく8つの視線を感じながら黙考し、俺は溜め息を吐いてやれやれと首を振り、苦笑しながら答える。

「わかったよ。やってやる」

了承の言葉を言うと、皆の顔がみるみる華やいでいく。やれやれ、俺の気も知らないで嬉しそうにしゃがって……まあ、悪い気はしないが……

「やった！これで5人目だ！」

「良かったですね、小波さん！」

……え？

「でもはるかには選手じゃないから実質は4人だね」

「それでも1人増えたのは大きいでやんす！」

まさか俺……選手として頭数に入れられてる！？

嫌な予感がした俺は、冷静であろうと努めながら小波に詰め寄る。

「ちょ、ちょっと待とうか。気のせいかな俺は入部した扱いになっていないか？」

「ん？ああ、悪い忘れてた。ハイ入部届」

「そういうことじゃねえよ！俺はコーチをすることは言ったが、入部するとは一言も言っていないぞ！？」

「いいじゃない別に。どっちにしろこの学校は生徒全員が部活に入らないといけないから、手間が省けて良かったでしょ？」

「そういう問題じゃあ……ハア、もういい」

横から入ってきた早川の言葉に反論しようとするも、連中の顔を見て言っても無駄だと悟り、俺は溜め息を吐く。

そして、最後の抵抗……というわけでもないが、条件を提示しておく

「ただし、籍は置出し指導もするが、指導は俺の都合に合わせてさせてもらうからな」

最近になって実感してきたが、一人暮らしするのは想像以上に大変だ。買出しや家事洗濯掃除全て一人でやらなければならない為、毎日コイツらに付きっ切りで指導していたら、そのどれかが疎かになってしまう。それだけは避けたい。

それに、コーチングについて勉強したいからな。やるんなら徹底的にこいつらを強くしてやりたい。

帰ったら本でも買って早速勉強してみようかね……

「わかった、お前にも用事や都合があるだろうしな」

「一人暮らしは大変そうですからね……」

「そうなんでやんすか？オイラからしたらウハウハなように感じるでやんすけど？」

「一人暮らしがウハウハか……そう思っていた時期が俺にもあったな……」

夜更かしし放題とか、女の子連れ込んでニヤンニヤンしたりとか……実際は自分の身の回りのこと全てしなきゃならないからな。慣れればどうってことないのだろうが、今はそんなことしている暇は俺には無い。帰ってからの大半の時間はトレーニングに当ててるし……

「まあともかく、その条件は呑むから、キミはちゃんとボク達を強くしてよ？」

「ああ、約束はできんが善処しよう」

全員理解してくれたようで助かる。

正直誘いを受けようか否かは相当迷った。

一人暮らし云々ってのはあるが、なにより自信がなかった。

コイツらをちゃんと強くしてやれる自信が……

しかし、コイツらの真っ直ぐした目と、アイツの目がダブって見え、それを見た瞬間純粹にコイツらの手助けをしてやりたいと思った。だから受けた。

俺にちゃんとした指導力があるかはわからない。

だが、これでも小中共に人の数倍は練習してきた自負はある。だからその経験と練習法、そして足りないところは俺が勉強して学び、教えればいい。

俺もコイツらも互いに未熟。なら互いに成長しあって、強くなろう。俺の胸の内は、これからの事に対する希望でやる気に満ち満ちていた。

「じゃあ今日から早速よろしくね」

「え、いや、今日は流石に……帰って練習メニューとか考えたいし……」

「よろしくね」

「いや、だから……」

「よ・ろ・し・く・ね？」

「……りょーかい承りました」

『仙道のやる気が下がった。疲れが溜まった。』

ああ、俺のやる気が……

## 二話（後書き）

さて、という訳でまさかのコーチスタート！

他のパワプロ9恋愛高校小説では、主人公がパワプロ君的立ち位置か、野球は辞めたけど何やかんやあつて選手として入部。といった流れがテンプレだったので、敢えてコーチスタートさせてみました。最近パワポタ3やってるんですけど、ほむら可愛いよほむら。この作品にも出しましょうかね……

さて、話は大きく変わりますが、途中にあつた属性の件で、実は元ネタには無い属性が一つ紛れています。これもわかる人にしかわからないネタ属性ですけどね……

ヒントはその後のコナミ君の呟きです。

次回は仲間を一人増やす予定です。

それではまた次回

### 三話（前書き）

地震の影響で遅れました。作者は何とか無事です。

さて、今回は半ばオリキャラが登場します。

そして、とんとん拍子に話が進むご都合主義前回です。

それでもOKという心の広い方はどうぞ……

前回の答えは後書きに



### 三話

放課後、掃除当番だった俺は校舎内を全力疾走している。理由は同じ掃除当番だった女の子と時間を忘れて談笑していたら、野球愛好会の練習開始時間を大幅に過ぎていた為だ。

急がないと早川に睨まれちまう。

今はウォーミングアップをしているぐらいの時間だろうが、そろそろそれも終わり各自練習の時間になるころだ。コーチ役を承ったのだから、その頃にグラウンドにいないのは流石にマズいだろう。少しばかり焦りながら走る速度を上げ、曲がり角を曲がろうとしたその時だった。

曲がり角の先に人影を見つけ、ぶつかりそうになったため慌てて止まる。

相手も同じようで、驚いた表情をしたまま身を仰け反らしていた。学ランをピシッと着ているのを見るに、数少ない男子生徒のようだ。

「おっと、悪い。急いでんだ」

だが、俺は現在進行形で急いでいるので、一言だけ謝りを入れて再び駆け出そうと足を踏み出す。だが……

「君は……まさか宵越中学の仙道君？」

知らない筈の奴から名前を呼ばれたことにより、俺は足を止めて振り返る。

そこには、柔らかな印象を受ける栗毛色の癖っ毛に、まだ幼さの抜

けきらない童顔の男子生徒がいた。

「ん？俺を知ってるのか？」

「知ってるも何も、君は有名だからね。猪狩守、山口賢と同じぐらいに」

旧友である天才君と、嘗て戦った男の名前が出てきたことにより、目の前の男が野球関係者だと推測する。その顔をよく見てみると、目の前の男の顔と自分の脳内にある情報が一致した。

「そついや俺、お前のこと見たことあるわ。確か……帝国中の海野、だったか？」

「あ、嬉しいなあ。君に名前を覚えられてたなんて」

「脅威になりそうな奴の情報は頭に叩き込んであるんでね……」

こめかみを指でトントンと叩きながら俺はニヤツと笑みを浮かべ、相対する男……海野ははにかむように笑みを漏らす。

帝国中学……それは高校野球界最強とも呼び声高い帝王実業高校の附属中学みたいなモノで、実力は勿論、設備、環境、指導者なども充実した全国屈指の強豪校だ。

海野はその帝国の補欠選手で、普通なら帝王にそのまま上がる筈なのだが……

そんな疑問を抱くと同時に、海野は首を傾げ俺に問うてくる。

「それにしても、何で君ほどの人がこの高校に？全国色んな高校から推薦の話が来てた筈じゃ……」

「まあ、確かにいろいろな所から話は来てたわな」

あかつき大附属とか、帝王実業とか、海東学院とか最近力をつけてきている西京とか……

「じゃあ何でこの高校に？」

「ん〜、一番の理由は女の子が多い。その次は家が近いから、だな」

「そんな理由で……？でもこの高校に野球部はないよ？まさか一から創るつもりじゃあ……」

「んな野球バカ発想はアイツだけで十分だ」

「アイツ？ああ、入学式にユニフォームで出てきた彼のこと？」

「ああ、そいつそいつ。やっぱアイツはいろんな意味で有名なのな」

まあ、一人すげえ浮いてたからな。あたりまえっちゃあたりまえか。

「入学式で横になって寝てた君も随分と目立ってたけどね」

……どうやら俺もらしい

「話が逸れちゃったけど、じゃあなんでこの高校へ？」

「ん〜まあ、簡単に言えば俺は野球を辞めたんだよ」

一時的ではあるがね。

そう語尾に付け加えようとするが、海野の表情を見て思わず口を噤

んでしまっ。

「辞めた……？」

何故なら海野は、目を大きく見開き、何か切羽詰まったような表情をしていたからだ。

「君ほどの人が野球を辞めた？あれだけの才能と実力があいなながら何で？どうして？」

疑問に疑問を重ねて海野はズイズイと俺に詰め寄ってくる。その様子は若干怒っているかのように見えた。というより実際に怒っているのだろう。それが何に対してなのかは俺にはわからない。だが、野球が関わっていることは確かだろう。

「落ち着けよ。あと近い」

「あ、ゴメン……」

鼻と鼻が触れ合うほどの距離まで接近していた海野は、その場から三步ほど下がり、気持ちを落ち着ける為か数回深呼吸して再び俺に真っ直ぐな視線を向ける。

「それで、何でなの？」

「……まあ、いろいろとあるんさ。とりあえずは肘が故障したから、つてことにしといてくれ」

一応、事実である。俺は中学で野球部を引退してからすぐに高校野球に備え、硬球でいつもの練習メニューの倍以上の練習をし始めた。

その結果、しばらくして投手であった俺の肘は見事に故障した。当然と言えば当然のことだった。

俺は毎日人の数倍は練習しているという自負がある。……まあ、自負があると言っても中三の中盤ぐらいに、アイツからそのことを言われるまで気付かなかったのだが……しかし、アフターケアを欠かさずに行っていたとはいえ、体も出来上がっていない内から人の数倍もの練習をすれば体のどこかにガタがくるのは当然のことで、そのツケが一気に肘にきてしまったらしい。医者に自分の練習メニューを教えたら普通に怒られたぐらいだ。曰わく、「明らかなオーバーワークにも関わらず、今までどこも故障せずに体が発達したのが不思議なくらいだ」らしい。

まあ、幸いそこまで酷い怪我ではなく、ストレートを投げたりバツティングをする分には問題無い。ただ、変化球が投げれなくなっただけだ。

故に野球をする分には別段問題などないのだが……

「肘の故障って……大丈夫なのかい？」

心配そうな顔で肘を見る海野に多少罪悪感を覚える。

別に嘘は吐いていないのだが、何やら深刻に事態を見てしまっているようだ。

「まあ、多少支障は出るだろうが大丈夫だろうよ」

そう言っただけで軽くシャドーピッチングをしてみせ、大丈夫だということアピールする。

その行動を見て、海野は安堵の息を漏らす。

会ったばかりの俺に対し、こんなリアクションを取れる海野は、根っからのお人好しなんだろう。

少しばかり好感度が上がったぜ。

「じゃあ今度はこっちの番だ。質問をそっくりそのまま返すが、何故お前程の選手がこんな学校にいる？」

俺の記憶が正しければ、コイツの実力は中学時代ではトップクラスに位置していた筈だ。

状況に応じて内外打ち分けられる技術に、バントやバスター、カットなどの小技にも長けた、チャンスを見事に演出してみせる技巧派打者。更に堅実且つ広い守備範囲を誇る、攻守共に優れたチームに一人は欲しい存在。帝国とは数回程試合したが、山口賢とコイツは大分印象に残っていた。

海野は俺の問いに表情を陰らせ、苦笑する。

「……買い被りすぎだよ。僕は君に目を付けて貰える程大した奴じゃない。所詮は補欠選手だしね」

「帝国のベンチ入り、ってだけでも誇れることだと思うがね」

確か帝国の野球部員数は100人近くいる。その中から選抜された20人のみが、公式戦と言う表舞台に立てる権利を与えられるのだ。その狭き門を突破した海野は十分凄い選手だと思うが……

「それでも、結果が出なければ意味はない」

「結果？」

「……僕は非力で肩も弱い。帝王には、そういう短所がある人材は必要としていないんだ」

悔しさを噛み締めたような歪んだ笑みを浮かべながら、海野は声を

絞り出す。

聞いたことがある。帝王実業は完全実力主義の高校で、帝国中では高校に上がる前に帝王野球部に入るに相応しいかどうか試験があり、その試験に受かった者だけが帝王高校野球部を名乗れるのだと。つまり、話の流れからして海野はその試験に落ちたということだろう。

「否定されたんだよ、僕の野球は……力が無くても技術があれば使って貰えるって信じていた。だから帝国では必死に努力した。でも、スタメンにはなれなかったし、帝王ではそれ以前に門前払い……」

「お前……」

顔を隠すように俯く海野に掛ける言葉が見つからない。否、言葉を掛けてやることができない。己が信じてきたモノを真つ正面から否定されたのだ。心に響かない訳がない。

俺にはそんな経験がまるで無く、寧ろ肯定されてやってきた為、コイツの気持ちを理解できないし、できるとも思えない。

共感などできよう筈もなく、同情は侮辱に価する。

故に俺はただ立ち尽くす。

先程の鬼気迫った様子を見るに、コイツもアイツと同じ様な人種だったのだろう。

才能が無くとも努力で補えばいい。

努力は報われる。ああ、いい言葉だ。素直にそう思う。

だが、現実つてのは厳しいモノで、努力したって報われない時の方が多い。

そして、海野は無情にも報われなかった。

努力つてのはマジでやればやるほど、報われなかった時の反動は大きい。ダメージ

そして、その反動ダメージが所謂挫折に繋がってしまう。  
海野は挫折を経験し、気概が折れてしまったのだろう。  
そして、海野は野球を辞めてしまった……

とまあ、とりあえず現実逃避気味にここまで推測したものの、現状は一向に変わらず気まずい沈黙が流れ続けている。

個人的には時間も押しているので早々にグラウンドに行きたいのだが、地雷を踏み抜いちまったのは俺なので、その選択はあまりにも気が引けてしまう。

さて、どうしたものか……

俺が真剣に悩み始め、もういつそのこと更に深く踏み込んでしまおうかと考え始めた時だった。

そこに、救いの女神が光臨する。

「ちょっと恵、何やってるのよ」

俺と海野しかいなかった筈の空間に響き渡る声。

視線を向けてみると、そこには肩口ぐらいに切りそろえられた髪に鉢巻きをした、美少女といってもいい女生徒……鉢巻き幸子が此方向かって歩いてきていた。

「さっちゃん……」

「その呼び方、いい加減止めてって言うてるでしょ。もうそこまで子供じゃないんだから」

呆れたように腰に手を当てる鉢巻き幸子に、俺は内心空気を変えるきっかけが来たことに安堵しながら、ワザと大きなリアクションを取る。



「お前は……鉢巻幸子！」

「誰よそれ！アタシは高木幸子よ！」

ああ〜そうだそうだ。高木だ高木。確か入部して間もないのに、ソフotball部のエースで四番になった噂の天才だったな。昨日からなんとなく引っ掛かってたんだけど、漸くスッキリしたわ。

「……何よ、そのムカつくぐらい清々しい顔は」

「ああ、気にしないでくれよさっちゃん」

「さっちゃん言うな！！！」

おお、案外からかいがいのあるキャラだったんだな、高木って。昨日の印象からもっとクールなキャラだと思っていたんだが……まあなんにせよ、お陰で先程の空気が払拭された。

俺は安堵の溜め息を肺から吐き出す。

そんな俺を後目に、二人は何やら親しげに会話し始める。

「ところでさっちゃんこそどうしたの？部活は？」

「ああ、今日は休みなのよ。だからアンタと帰ろうと思ってね」

「そうなんだ。じゃあ悪いけど少し待ってて。荷物取ってくるから」

「別に急がなくてもいいよ。用事があるってわけでもないしさ」

「いや、僕が早くさっちゃんと帰りたいから急がせてもらおうよ」

「まったく……じゃあアタシも一緒に行くよ。それならいいでしょ？」

「うん、勿論。それじゃあ仙道君。僕達はこれで」

「おう、じゃあな……って、ちょっと待てえい！」

俺を差し置いて歩きだそうとする二人に、俺はノリツッコミのように制止の声を掛ける。

不思議そうな顔をして此方を見てくる二人に、俺はひとまず落ち着く為に息を吐き出し、やや真剣な面持ちで尋ねる。

「普通にスルーしちまってたけど、お宅ら知り合いなのか？まさか付き合ってるのか？」

「っ、付き合ってるって、ちちち、違うよ！僕らはそんなんじゃないよ……」

「そうよ。アタシらはただの保育園来の幼なじみ。そんな浮ついた関係じゃないよ」

顔を真っ赤にして否定しようとした海野の後を継ぎ、高木が呆れた様子でバツサリと俺の予想を否定する。その否定の言葉に海野が肩を落としている所を見るに、どうやら片思いをしているらしい。だが、そんなことどうでもいい。何故なら聞き捨てならない単語が聞こえてしまったからだ。

「こんな美少女が幼なじみ、だと……！？海野、貴様ア……！」

「え、ええ！？」

「ちょっと、恵を威嚇しないでよ。それと、煽てても何も出ないよ」

おっと、つい嫉妬心が態度に出ちまったらしい。

だつて普通に羨ましいし。美少女の幼なじみとか……俺の幼なじみなんて野郎ばつだからな。まあ、全員いい奴らなのだが……

徐々に奴らの顔が脳裏に浮かび郷愁を感じていると、そこにキィイイン！と甲高い金属音がグラウンド方向から聞こえてくる。それを聞いて、俺は本来の目的を思い出す。

「っと、やべえ忘れてた。急がねえと早川にキレられちまう」

時間は大分過ぎてしまっている。先程のバットの音から察するにも練習が始まってしまっているのだろう。

最早完全にアウト。睨まれることは確定。だが、ここで更に遅れようモノなら更にキレられそうなので、急ぐことに。

「んじゃ、ご両人。俺は急がないといけない理由があるからこれにて」

そう言つて足を踏み出した瞬間、背後から先程までと違う冷めた声  
が飛んでくる。

「……本当に通用すると思つてんの？」

突然の問い掛け。主語も何もないが、これの意味することは理解できる。

だから俺は立ち止まって振り返り、笑みを浮かべながら答える。

「ああ勿論。やり方次第で幾らでも化けると思つぜ、アイツは」

「絶対にあの娘、後悔することになるよ。そうなる前に、あの娘は野球を辞めさせた方がいい」

「……どうもアンタのその忠告には、少なからぬ私情が入っているっばいな……」

「ッ……」

気怠げに呟いた言葉に、高木は若干息を詰まらせピクリと眉を跳ね上げる。

キャッチャーとして鍛え上げられた洞察力がそれを見逃す筈も無く、俺の目は高木の表情の機敏を目敏く捉えた。

「……ま、深くは聞かないでおこう」

しかし、表情の機敏だけでなく地雷臭も感じ取った為、肩を竦めるだけに留めておく。

流石にさっきの二の舞なんてゴメンだからな。

「とりあえず一つだけ言えることは、あんま早川を嘗めるなよ。あんな可能性を秘めた奴はそうそういねえぞ？」

男でも女でもな。と語尾に付けたし、俺は急いでグラウンドに向かうため走り出した。

ああ、睨まれるだけで済めばいいが……

\*

仙道君が走り去ったのを見届け、僕達は窓から差し込む夕日を浴び

ながら立ち尽くしていた。

「さっちゃん……まだあの時のことを……」

「……女が野球なんかしたって……」

悲しそうな、悔しそうな顔をして俯くさっちゃん。恐らく昔を思い出しているのだろう。

さっちゃんも昔は件の早川さんみたいな野球少女だった。元々運動神経の良いさっちゃんはすぐに才能を開花させて、地元の野球クラブのレギュラーになった。試合でも活躍をして、当初は女だからと侮っていた皆も認めていった。

けど、学年が上がっていくにつれて男女の体力の差が始めて、さっちゃんはレギュラー落ちした。当初は周りに負けていられないと、さっちゃんは練習が終わった後も、周りの何倍もの努力をした。しかし現実は無情で、さっちゃんがいくら頑張ろうとも、いくら技術を身に付けようとも、男女の間にある身体能力の差は、それらをも簡単に無くしてしまう。その事実を突き付けられてしまったさっちゃんは絶望して、大好きだった野球を諦めた……

僕はあの時のさっちゃんの顔を今でも覚えている。

悔しさから歯を食いしばり、声を殺して泣く彼女の顔を。

だから僕は証明しようとした。

他の同い年の男子よりも目に見えて小柄で非力な僕でも……身体能力の差がどれほどあろうとも、技術だけでも上に立てるということを。そうすることにより、彼女の心が少しでも救われれば良いと思っただから、僕は地元の中学ではなく地元から少し遠い帝国中学に入学したのだ。

まあ、結果は無残なモノだったけどね……

「恵、あんたどうするの？」

「え、何が？」

思考をしている時に声を掛けられ、僕は少し慌ててしまう。さっちゃんの顔には、先程の表情の欠片も見受けられない。その事に内心少し安堵する。

そんな僕の表情が出ていたのか、さっちゃんは一瞬怪訝そうな顔をし、しかしすぐに表情を戻すと、僕の目を真っ直ぐ見据え問う。

「野球、本当はやりたいんでしょ？」

「……………」その問いに僕は答えられない。答えられない。そんな僕にお構いなしに、さっちゃんは言葉を続ける。

「この高校は生徒全員が部活動の加入を義務付けられているわ。ちよつどいいじゃない。入ったらどう？野球愛好会」

「でも、僕はさっちゃんのサポートを……………」

そう、自分の積み重ねてきた野球を否定された僕は、ソフトボールという新しい道を歩んでいるさっちゃんの補佐をする為にこの高校に入ったのだ。

その為、ソフトボール部のマネージャーになろうと決めていたのだが……………」

「それを、アタシが本当に望んでいると思ってるの？」

「……………」

「アタシのことはもう気にしなくていいわ。  
アタシが望んでいること、それはアンタが自分の道を進んでくれる  
ことよ」

「自分の、道……」

「アンタはいつもアタシの後ろをついて回る存在だった。何をす  
にしてもずっと一緒。でも、そんなアンタが初めて自分からやり始  
めたのが野球だった」

「さっちゃん……」

「アイツらは帝王の連中とは違う。あの娘は気に入らないけど、み  
んな楽しそうに野球をやってるよ。だからもう一度、やってみたら  
？きっとアンタの野球を肯定してくれるよ」

「でも、僕はもう……」

さっちゃんが背中を押してくれているが、やはり躊躇ってしまっ  
た。気概は折れ、目標も無い。それなのにもう一度野球をやれなんて言  
われても……

迷いや恐れにより僕は深く俯く。

一度否定された事實は、僕をトラウマという鎖で縛り上げる。

やっぱり野球なんて、もう……

その後ろ向きに考え始めた時だった。

「ああ、もう焦れたい！！男ならばきりしなさい！要は野球が  
好きかどうかでしょ！？」

「ッ！？」

悩み俯いている僕に一喝。

それは彼女なりの説得の言葉なのだろう。

彼女の性根のように真っ直ぐすぎるが故に極論だが、それがなんと  
も彼女らしい。・

その一言に、僕を戒めていた鎖トリアウマが解け、そして胸の中に現れる答え。  
がむしゃらになりすぎて忘れかけていた感情。

そうだ、僕は野球が好きなんだ……！

「……答えは決まったみたいだね」

僕の顔を見てさっちゃんは、成長した弟を見るかのような優しい笑  
顔を浮かべる。

そして、僕がこの気持ちを思い出させてくれた彼女に一言お礼をし  
ようとした瞬間、彼女は僕の手首をがっしりと掴み、ズンズンと廊  
下を歩き始める。

「じゃあ早速入部しに行くよ」

「え、今から！？僕にも心の準備というものが……」

「アンタはいつも行動が遅いから、放っておくと何時になるかわか  
らないでしょ？」

だからアタシと一緒に行ってあげるよ。

それに思い立ったら吉日、善は急げって言葉もあるんだしね」

そうして僕はさっちゃんに手を引かれながら、半ば引き摺られるよ  
うにしてグラウンドへと向かう。

その道中にふと思う。

さっちゃんが手を引いて、その後ろを僕が付いて行く。



この構図から卒業するのは、まだ先のようだ、と。

そして、同時に思う。

僕はやはり証明したい。如何ともし難い身体能力の差を、やり方や技術で覆すことができるということ……

でも、僕のその志は折れた。完全実力主義の帝王の厚き壁によって

……

だから、勝手ながらこの志を別の人に託したいと思う。

そこで僕は、顔も知らぬ野球少女を思い浮かべる。

早川あおい

女という身で野球をしている、野球愛好会の一員。

さっちゃんから話しただけ聞いているけど、僕は実は早川さんに少しの興味と期待を抱いている。

あの『怪物』仙道恭志郎に見初められたその可能性……悪いけど試させてもらっよ、早川さん……

僕は自分でも驚くほど怪しい笑みを浮かべると、そのままさっちゃんに引き摺られていった。

\*

場所は移り、夕焼けに照らされしグラウンド。

運動部の青春が詰まったこの場所にて、俺は正座をさせられていた。目の前には仁王立ちしている早川の姿があり、その後ろには残りの野球愛好会メンバーが此方を見守っている。

何故このような状況になっているかと言うと、簡単に言ってしまうえば遅刻した報いを受けている、といった感じだ。

流石の俺も、まさか土の上に正座させられるとは思っても寄らなかつた……

「遅かったねえ、仙道君……コーチを引き受けてくれるって言った君が、初日から遅れるなんていうのはどういう了見なのかなあ？」

「ダツハハハハ、ま、まあいろいろあったのだよ」

「ふうん……いろいろと、ねえ……」

ヤバイ、視線がめっちゃ冷たい。これは蔑んでる云々以前に人を見るような目じゃない。

見えない圧力に背中に冷や汗をかき始める。まるでUBLのホームランキング、ボーマン・バンガード並みの威圧感だ。いや、相対したことないけどよ……

そんな俺の状況を見かねたのか七瀬と小波が助け舟を出してくれる。

「あおい、そろそろ許してあげても……」

「元はといえば俺達が無理に頼んだことなんだしさ……」

「でも、あおいちゃんが怒るのも無理ないと思うでやんす。仙道君が来るのを一番心待ちにしてたのは、あおいちゃんでやんすからね」

え、マジで？いつの間にか早川とフラグ立てたのよ俺は……

矢部の言葉に湧き上がる申し訳なさと共に、少しテンションが上がる。

「だってピッチングするなら、ちゃんとキャッチャー相手に投げ込みたいし……」

しかし早川の唇を尖らせながらの呟きにより、一気にテンションが下がる。

……まあ、そんなこつたろうと思いましたがよ。べ、別に期待なんかしてねえよド畜生！

だが、俺が遅刻したのも早川や皆を待たせてしまったのも全て俺のせいなので、膝の横に拳を置いて素直に頭を下げる。

「そいつは悪かったな。今後は遅刻しないよう気を付ける」

「本当に？」

「大の男が恥忍んで頭下げたんだ。信じてくれ」

「……」

早川はしばらく俺を見つめ、一つ息を吐き出すと、少し気まずそうに視線を逸らす。

「分かった、信じるよ。それにボクも少し苛付いてたからさ、八つ当たりみたいになっちゃったね。本当にごめん」

え？八つ当たりで俺あんな状況に陥ってたのか？

そんなことを思わなくもなかったが、今回は俺に非があるので軽く返しておく。

「お前が謝る必要はねえよ」

「じゃあ、お互い様って事で」

「ああ、お互い様って事で」

早川は悪戯っ子のような微笑を見せ、それに俺は苦笑を返す。

このやりとりにより、先程までの重苦しい空気が解消され、他の三人もホツと安堵の息を漏らす。

「それじゃあ早速だけど指導お願いね。ほら、立った立った」

ようやくと許しが出たので、俺は制服に付いた土を払いながら立ち上がる。

「はいよ任された。つつても、俺はお前らがどうい選手なのかわからないからな。そこから知っていききたいと思う」

「どういう選手、でやんすか？それは指導に何か関係があるんでやんすか？」

「そりゃあるだろうよ。当面の方針は基礎体力造りだが、それと並行してお前らの武器を磨き上げる為にな」

「武器？」

首を傾げる小波に、分かりやすく説明しようとして親指で矢部の足を指す。

「例えば矢部なら足だな。この前の練習を見させて貰ったが、お前はなかなかの俊足を持っている。これはお前の武器だ。俺はその足を更に速くしたり、活かしたりできるように指導していく」

「なるほど……つまりは長所を伸ばす、ってことだね」

「まあそういうことだな。そして俺はまだお前ら全員の武器を把握仕切れていない。だから教えて欲しい」

俺の今年の指導方針は『徹底的な基礎造り』そして『長所を伸ばす』だ。

野球だけではなく全てのスポーツに置いて基礎は大事だし、確固たる長所長所は勝利するためには絶対必要だ。故に、俺はその二つを徹底的に鍛え上げる。無論、短所もある程度は直すが、あくまである程度。短所を完璧に直す時間があるなら、長所を更に磨き上げる。

無理に満遍なく鍛えようとして、器用貧乏になっちまったら目も当てられないからな。

博打要素は非常に強いが、こうでもしないと強豪に勝つことは難しい。

それに、コイツらは男子を勧誘しているが、入ってくる奴らが野球経験者とも限らないから、現状ではこの指導方がベストだと俺は思う。

そこまで思考を纏めたところで各々が己の武器を親告する。

「オイラは察しの通り走るのが得意でやんす！これだけは誰にも負けないでやんす！」

「んじゃ、矢部は走塁盗塁、後はバントとかその他諸々を鍛えようか。目指せ赤星二世」

「頑張るでやんす！」

「ボクはコントロール、かな？あとシンカーにも自信があるよ」

「コントロールとシンカーか……まあ、実際に見てみないことにはどれくらい使えるかわからないから、とりあえず後でピッチングな」

「うん、わかったよ。よろしくね、仙道君」

「俺はそうだな……肩と打力にはそれなりに自信があるぞ」

「ああ、お前はとりあえず保留で」

「何で!？」

何故保留か……それは正直コイツのスペックがわからないからだ。イマイチ上手いのが下手なのか分らないし、何が長所なのかわからない。そのくせ何故か凄まじい理解力と吸収力を備えている。そんな奴を一生徒でしかない俺にどうしろと?どうしようもない。故に保留。まあ、どんなに理解力と吸収力があるうと土台である基礎が出来ていなければ無意味なので、とりあえずは馬車馬の如く走らせておくとしよう。

「お前も追々決めるから安心しろ。今はとりあえず基礎トレ中心にやってもらおう。」

何事も土台は大切だからな」

「わかった!とりあえず走りこめばいいんだな?」

「まあとりあえずはそうだな。尤も、走りこみ以外にも色々やってもらおうつもりだから覚悟しておけよ?」

あと、七瀬にも色々と手伝ってもらおうと思うからよろしく」

「え、は、はい！わかりました！」

いきなり話を振られたので慌てる七瀬。うん、和むね。

やはり部に一人はこういう癒し系は必要だな。

そんなことを考えながら、一通り得意分野という武器を聞いたので、コーチらしく指示しようと口を開く。

「さて、方針が決まった所で早速練習……」

「仙道」

しかし、そこに声を掛けられ中断される。少々恨みがましく声のした方に目を向けてみると、そこには高木と海野が揃って立っていた。

「ん？ああ、さっちゃんか。どした？」

「さっちゃん言うな！じゃなくて、少し頼みごとがあるんだけど」

「頼み事？」

腕組みをしながら聞き返すと、高木は一瞬海野に目配せをする。高木の視線を受けて海野が一つ頷くと、海野の気持ちを代弁するかのように高木は口を開いた。

「恵を野球愛好会に入れて欲しいの」

「海野を？」

海野は野球を辞めたのでは？というか何故俺に言う？などと思わなくもなかったが、とりあえず聞き返してみる。

俺としても、海野のような実力者が野球に戻ってきてくれるのは喜

ばしいことだからな。

「いいのかよ、幼馴染を此処に入れちまって？あんたは野球を嫌ってるんじゃないのか？」

「アタシが気に入らないのは女なのに野球をしているその娘だけであって、野球自体を嫌ってるって訳じゃないさ」

その言葉に早川が反応するが、手で制しておく。

前のように口喧嘩でも始められたら話が進まないからだ。

高木はどこか苛立だしくも、誇らしげな口調で言葉を続けた。

「他の奴らはみんな見る目がないだけで、恵の実力とセンスは本物だよ。それを埋もれさせるには勿体無いしね」

成る程、彼女の言い分は理解した。実際俺も同意権だしな。

だが、最も重要なのは本人の意志だ。

もしも高木に強引に此処に連れられて来たのならば、俺としては追いつきたいと思う。

嫌々練習をやられちゃ上手くなるモンもならねえし、そんな奴がいるんなら周りの士気にも関わる。何より激しく目障りだ。だから俺は真剣に海野に問い掛ける。

「海野、お前はどうかなんだ？もう一度野球をやるのか？」

「うん、僕はもう一度野球をやりたいと思っているよ」

はっきりと自分の意志を口にする海野。

その真摯な響きの籠った言葉には、嘘偽りが無いことが分かった。

俺はこれほどの人材が野球を辞めないということに内心喜び、周り



は新しい仲間が増えると歓喜する。  
だが、海野の言葉には続きがあった。

「ただし、入部するに当たっては条件がある」

「ちよつと、恵………？」

「条件？」

小波が首を傾げて聞き返す。

他の連中も同じ様な顔をしており、かく言う俺も同じ様な表情をしている。

聞き返された海野は、視線を変えて早川の方を真っ直ぐと見ると、その条件を口にする。

「早川さんと僕が勝負して、納得できたなら入らせて貰うよ」

海野が提示してきた条件に周りほどよめき、高木は驚愕に目を見開く。

「恵、アンタ………!!」

「さっちゃんは黙ってて!」

「ッ!?!」

詰め寄ろうとした高木を、外見からは想像できない強い言葉で黙らせる。高木は驚愕と困惑が入り混じったような顔で海野から一步退き、海野は真っ直ぐと早川を見つめる。

その目には強い意志が秘められているように見えた。

「僕じゃあ役不足だろうけど、見極めさせてもらおうよ。仙道君が言  
つてた可能性ってヤツを……そして証明してみせてくれ。女でも男  
に劣らないことを……」

その言葉に早川は俺に視線を向けてくる。俺はそれに対し素知らぬ  
顔で視線を逸らす。

そんな俺の様子に何か感じ取ったのか、早川は一つ頷くと今度は海  
野に視線を向けて、ハッキリと自分の意志を告げる。

「わかった、その勝負受けて立つよ。そして君に勝って証明してみ  
せる。女でも、男には引けを取らないってね」

条件成立。

海野は返事を聞くや否や持っていた鞆を置いて学ランの上着を脱ぐ  
と、小波か矢部が使っていたのであろう、転がっていたバットを手  
に取り左打席に入る。

「ボクも少し調整してくるよ。矢部君、キャッチボール付き合っ  
て」  
「任せるでやんす！」

そう言つて早川と矢部はブルペンへと向かい、キャッチボールを始  
める。

しっかし勝負か……少々厄介なことになってきたな。  
それに相手は海野か……ふむ

「じゃあキャッチャーは俺がやる……」

小波がキャッチャーをすると名乗り出るが、それを手で制す。

「いや、キャッチャーは俺がやる。高木、ソフトボール部のプロテクターとレガースとマスクを貸してくれ」

「あ、ああ、わかったよ」

ソフトボール部の部室へと走っていく高木を見送り、俺は学ランの上着を脱ぎストレッチを始める。

そこへ、不安げな顔をした小波が近付いて来た。

「大丈夫なのか仙道？お前キャッチャーなんて出来るのか？」

「あれ、お前にや言っただけじゃなかったか？俺はピッチャーとキャッチャーの両方ともいけるんぞ」

今はキャッチャーしかできないがな……

「……初耳だぞ」

「そうだったか？まあ、いいや。それよりグローブ貸してくんねえか？」

「あ、ああ、内野用しかないけど大丈夫か？」

「十分。捕れりゃ何だっただけいい」

「わかった。ちょっと待ってる」

そう言い残して、小波は自分のグローブを取りにいった。それと行

き違いに、高木がキャッチャー道具一式をガツチャガツチャと鳴らしながら戻ってくる。

「ホラ、マスクにプロテクターにレガース。一番デカいのを持ってきたけど、女子のやつだから少し小さいかもしれないね」

「ああ、十分十分。要はファールチップから体を守れりゃいいんだからな」

そう言いながら受け取り、早速装着していく。やはり女子用ということもあり些か小さいが、体を守るという役割さえ果たしてくれれば別段問題無い。

レガースも同じ様に着用し、最後にヘルメットを被る。マスクはまだしなくてもいいため、バンドをヘルメットの後頭部に引っ掛け、頭に乗つけるように被っておく。そうしてサイズの影響で多少見栄えは悪いが、約半年ぶりのキャッチャー姿に俺はなった。

「仙道、持ってきたぞ」

装着が終わるとほぼ同時に小波がグローブを持ってきた。『ミゾツト』のアルファベットのロゴが入った、茶色い内野手用のグローブだ。

「おう、悪いな。借りるぞ」

礼を言いながらそのグローブを受け取ると早速手に嵌め、調子を確認するためにグローブを閉じたり開いたりしてみよう。大分使い込まれているようで、グローブは柔らかく自在に動いてくれる。

成る程、良いグローブだ。しっかりと手入れされて大事に使われて

いることがよくわかる。

若干小さく思えるが、捕球する分には何も問題無い。

「ところで本当にいいのか？」

「何がだ？」

「お前は野球をやりたくないんだろ？だったら俺がキャッチャーをやった方がいいと思うが……」

「あいつが少し上手い程度の奴だったらそれでも良かったんだがな。お前リードとかできねえだろ？」

「やったことはないが、それがどうした？」

「勢いだけで打ち取れる相手じゃないってことさね。どっかの誰かさんみたいに」

「……それは俺のことがコラ？」

「他に誰がいんだよ。ストレート宣言してやったたつてのに、結果はピッチャーフライとか……よくそんで甲子園なんて大口叩けるな？」

「う、うるさい！これから努力しまくってお前を打ち崩してやる予定だからいいんだよ！」

「寧ろ俺程度普通に打ち崩せなきゃ甲子園なんて夢のまた夢だぞ。つと、話が逸れたな」

グローブに拳を打ち付けて形を作りながら、俺はチラリと素振りをして、視線を小波に戻す。

「ぶっちゃけあいつは現時点でのお前より百倍は上手い。つーか比べることすら烏滸がましい程の差があるな」

「そ、そんなに……？というか、仙道は彼のことを知ってるのか？随分と高評価だけど」

「帝国中学野球部背番号10番、海野恵」

「……は？」

「つまりあいつは彼の帝国中学で10番目に野球が上手かった男、だということだな」

尤も、俺が見るに実質的な上手さはスタメンの奴より上だった。恐らくは総合力重視の帝国でなければ普通にスタメン入りできたのであろうが、非力と弱肩が足を引っ張ってしまったのであろう。

「そ、そんな奴がなんでこの高校に!？」

「いろいろとあるんだろうよ。まあ、とりあえずはチャンスと思っどけよ。あいつが入りゃ一気に戦力が上がるぜ？」

驚く小波にポジティブに考えろよ、と言って小波の胸を叩く。少し力加減を間違えて咳き込んでいるが、そこはスルーしておこう。

つーか俺としては、コイツが帝国を知っていて宵越を知らないことが腑に落ちない。一応ネームバリューはそこまで劣ってもいないと思っただが……

「ゲホツゲホツ……それはそうだけど、勝てるか？」

「無理よ。あの娘じゃ絶対、恵には勝てないわ」

小波が不安そうにキャッチボールをしている早川を見つめると、高木が淡々とした口調で口を挟む。その目には確信に近い色があり、表情はどこか早川を哀れんでいるように見える。だがその発言に、意外な人物が反論する。

「あの方がどれほど凄いかはわかりませんが、あおいは絶対に負けません！」

怒りを滲ませながら早川の親友、七瀬は反論する。そのことに俺は少し驚く。

全く怒らないキャラだと思っていた七瀬が、怒りを秘めた目で高木と対峙したからだ。

普段はおっとりとしているが、ちゃんと怒る時は怒るらしい。

二人はただじつと睨み合い、そのまま口論に発展する。

そんな中意外に冷静なのが小波だ。二人の口論を遠い目で眺めながら俺に問うてくる。

「仙道、お前は どう見てるんだ？」

小波の問いかけに顎に手を当てて思索し、思ったままの予想を口にする。

「……普通にやりゃあ8：2で早川不利だな」

俺の答えに小波は「そんなに差があんのかよ……」とげんなりした

様子で肩を落として眩く。

客観的に見てそれぐらいが妥当だと思う。

海野は間違いなく全国クラスの選手だ。特に守備と『当てる』という技術に関しては全国屈指の実力を持っている。対する早川は名も知られていない女投手。球速も球威も平均以下で、コントロールがそれなりに良いのが救いか。後はシンカーがどれほどのモノかによって、勝率が左右するだろう。

海野の弱点は非力だ。だから球威のある投手ならいくらでもやりようがあるのだが、早川は球威の出にくいアンダースロー投手で、その上筋肉量が男より劣る女だ。そこら辺のピッチャーより球が軽い為、力押しや多少強引な投球は危険すぎる。故に精密な投球が要求されることになるだろう。考えれば考えるほど分が悪い。

「だが、その勝率を上げるのが俺のキャッチャーの仕事だ」

そう言うって俺は笑い、ゆっくりと歩き出す。早川は十分に肩を温める終えたのかマウンドに上がり、それに気付いた海野はフォームチエックを兼ねての緩い動作での素振りを止め、鋭い視線を早川に向ける。その顔には少し前までの温和な表情の欠片も見受けられない。こういう切り替えができる奴は非常に厄介だ。

「ま、遅刻した分は此処で返しとくしますかね」

そう一人呟き、俺はこれから繰り広げられるであろう真剣勝負に内心心を踊らせながら、とりあえず早川の元へと向かった。



### 三話（後書き）

前回の後書きの答えで、原作に無かった属性とはずばり……

#### 『緑髪伝説』

です……

緑髪伝説とは、パワポケをやったことがある人なら聞いたことあるであろう属性……その名の通り緑色の髪をした彼女候補の総称です（一部違います……）。そのイベントの多さにプレイヤーは楽しみ、その特典のおいしさにプレイヤーは喜び、その可愛さにプレイヤーは悶える……見たこと無い方、興味を持った方はググるか、某2525動画で見てみて下さい。きつと良さがわかりますから……  
ああ、ついでにこれは小ネタなんですけど、作中であつた、譲れないこの儂いプライド、というフレーズはパワプロ11のOPの1フレーズです。個人的にはパワプロ11かパワプロ9のOPが最高だと信じているので、入れてみました。  
それではまた次回お会いしましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5388r/>

---

実況パワフルプロ野球！～嗚呼、素晴らしきかな野球人生～

2011年4月10日11時56分発行